

6
17



按摩の葉

60-176

醫學士中原貞衛著

挿圖二十一

按摩のわらわりの金

明治

38 8 28

内交

吐鳳堂書店發行

緒言

著者は外科後療法として按摩法を劇賞する一人なるが今回軍に従ひ廣島豫備病院にありて已に年餘戰傷者の治療に従事し益其有效有要なるを認め之を看護者に教授しつゝあるの際吐鳳堂主人より此等醫學素養少なき人の参考書として特に簡易の按摩法を編纂し呉れとの請あり恰好のことゝて此請を容れたるが主人の甚しき催促に餘儀なくせられ旬に脱稿せり故に或は不足なる所あらん是は他日閑を得て補ふことゝせん

著者識

按摩の葉目次

第一編 總論	一頁
第一章 按摩の意義	一
第二章 按摩の要約	八
第三章 各個手技	九
一 輕擦法及線狀擦法	九
二 揉捏法	二
三 強擦法又重擦法又摩擦法	四
四 叩打法	五
五 振顫法	七
第四章 自力及他力運動	八

第二編 各論

第一章 筋按摩

第一 四肢筋按摩

天 上肢

イ 前膊

輕擦法

伸筋族

屈筋族

揉捏法

伸筋族

屈筋族

ロ 上膊

二〇

二〇

二〇

二〇

二一

二一

二一

二三

二四

二四

二四

二

地 下肢

イ 下腿

前脛骨筋族

腓骨筋族

腓腸筋族

ロ 大腿

四頭股筋族

內送筋族

廣筋膜張筋族

二頭筋族

三頭筋族

三角筋族

地

イ

前脛骨筋族

腓骨筋族

腓腸筋族

ロ

四頭股筋族

內送筋族

廣筋膜張筋族

二五

二六

二六

二七

二七

二七

二九

三〇

三一

三一

三一

三一

三

二頭股筋族	三四
半腱狀及半膜狀筋族	三五
臀筋族	三五
第二 軀幹筋按摩	三六
天 背部	三六
脊柱伸筋族	三八
潤背筋	三八
僧帽筋	三九
地 胸部	四一
人 頸部	四二
第二章 關節按摩	四五
腕關節の按摩	四九

手掌	五〇
肘關節	五二
肩關節	五三
足及足關節	五四
膝關節	五五
股關節	五七
第三章 其他の按摩	五七
腹の按摩	五七
神經痛	六三
乳痛	六四

按摩の葉目次終

按摩の葉

陸軍三等軍醫正 醫學士 中原貞衛纂著

第一篇

總論

第一章

按摩の意義

- 一 我國には現今日本按摩と西洋按摩とあり日本按摩は遠心性西洋按摩は求心性なり
- 二 遠心性とは中樞より末梢に向ひて按摩するを云ひ此按摩に適するは神経なり故に又神經按摩法と稱すべし
- 三 求心性とは末梢より中樞に向ひて按摩するを云ひ此按摩に適するは筋なり故に又筋按摩法と稱すべし

四 兩法とも目的は一なり、其目的とは何ぞ、曰く新陳代謝の幫助なり、新陳代謝とは例へば疊の表替の如し、陳きが謝し去り、新しきが之に代るなり

五 凡ての生物の組織は絶えず新陳代謝をなし、瞬時も休止することなし、生物の生氣あるは之が爲なり、骨も肉も爪も鬚も同じく日夜少しも休むことなく新陳代謝す

六 身體の發育するは陳謝する方より新代する方の勝れる爲にして、二圓を費し三圓を獲れば、差引一圓の得あるが如し、身體の衰弱するは之と反對に新代する方より陳謝する方の勝れる爲にして、二圓を獲るに三圓を費し、差引一圓の損あるが如し、小兒には新代勝ち、老人には陳謝勝ち、小兒の成長し、老人の萎縮するは之が爲の

み

七 新代するは榮養品にして、陳謝するは老廢物なり

八 榮養品は食物及空氣にして、體外より之を體內に攝取し、老廢物は尿矢汗等にして、體內に生じて之を體外に排泄す

九 榮養品は胃腸及肺より血液の媒介によりて、體內組織に持ち行かれ、老廢物は體內組織より血液の媒介によりて持ち去られ、腸腎臟、皮膚等によりて體外に排泄せらる

一〇 持ち行くは動脈血にして、持ち去るは靜脈血、淋巴もなり、動脈と靜脈は中樞は心臟により、末梢は毛細管によりて相連り、動脈は遠心性に靜脈は求心性に絶えず體內を循環す、故に新陳代謝は血液循環によりて營爲せらる

二 血液循環盛なれば新陳代謝も盛に血液循環衰ふれば新陳代謝も衰ふ幼者の生氣に富み老人の生氣に乏しきは彼には血液循環盛にして此には盛ならざるによる

三 即ち按摩は血液循環を補助するものなり

三 血液循環は神経の作用なり神経を按摩即ち刺戟すれば其機能旺盛して血液循環を善くす故に日本按摩即ち神経按摩は有效なり

四 動脈血は進行力強けれども静脈血の進行力は微弱なれば循環を催進するには静脈の血流を補助す

五 静脈は主として筋肉及筋間組織内を通るものなれば筋肉を末梢より中樞に向ひ壓迫し行けば静脈血は其流るる速力を増す

故に西洋按摩即ち筋按摩は有效なり

一六 今兩法を馬車に譬へんに日本按摩は馬に鞭つが如く西洋按摩は車を推すが如し其效力の大小言はずして明なり

一七 故に治病上には吾人西洋按摩を賞用す然れども日本按摩も決して無効なるにはあらず兩者を併用すれば效能益多かるべし

一八 疾病とは何を身體組織に不足又は過剰を生じたるの謂なり熱病等にして衰弱するは筋肉其他の不足するなり淋巴腺の腫大は淋巴組織の過剰なり

一九 凡て生物の組織には皆自然に不足あれば補ひ過剰あれば殺きて常態を保たんとするの能力あり捨置きて疾病の治癒するは之が爲なり

二〇 然れども此自然療法には自ら制限あり如何なる不足如何なる過剰にても治し得るものにあらず自然療法の及ばざる所は人為を以て之を助けざるべからず醫術のある所以なり

二一 組織の不足を補ひ過剰を殺ぐは血液の力なり血液循環旺盛すれば此作用旺盛す循環を旺盛する按摩が醫術の樞要なる位置を占むるは之が爲なり

二二 故に按摩を適當に用ふれば凡ての疾病に有效なるべきこと勿論なれども此適當に用ふるといふこと容易ならず適當に用ふるには先づ確實なる診断を要し確實なる診断は解剖生理及病理を詳知せる者即ち名醫にあらざれば爲し得ず用法不適當なれば害あるも益なし

二三 今日本按摩法が追日聲譽を得來りたれども未だ其用途の廣からざるは一に前項の理由に基くなり故に按摩法は他治療と同じく決して醫師以外の者に任ず可からず

二四 治療は醫師の専有なれども検温、繃帶、洗創等の各個手技を看護人に命じて行はしめ得る如く按摩法も其各個手技は之を看護人等に指圖して行はしめ得

二五 故に看護人は自ら按摩法を用ふるにあらず只按摩の各個手技を會得習熟し常に醫の指圖に従ひ按摩すべきのみ

二六 此書は看護人の爲にせるものなれば只按摩法の各個手技を説述するに止む

第二章 按摩の要約

按摩に必要なる條項左の如し

- 一 手指柔軟華奢なるを要す
- 二 上肢諸關節の完全なるを要す
- 三 濕手は適せずと雖も用に當り數回酒精にて洗ひ「タルク」等の撒布料を用ふれば用ひ得べし
- 四 粗糙の手は適せずと雖も「ワゼリン」等の塗布料を用ふれば用ひ得べし但し塗布多かる可からず多きに過ぐるときは手指滑りて力入らず
- 五 多毛の部は先づ剃刀を用ふべし按摩により毛根に炎症を發

する恐あり

- 六 按摩する部分は必ず裸出すべし決して衣を被ふべからず日本按摩の如く衣上よりすれば力を費すこと多くして效力少なし
- 七 患者には最も安樂なる體位を取らしむべし

第三章 各個手技

按摩法の各個手技は左の如し

一 輕擦法 又線狀擦法

是按摩法の本原にして他の手技は此れの幫助法又は變形なり而して又常に他方を行ふに方り其前後及び中間に行ふものなり故

に最も善く會得習熟するを要す
輕擦法は平手を以て體部を末梢より中樞に向ひ密に壓しつゝ行
くなり
此密にといふは體部と手掌との間に隙の無き様弛みのなき様即
ち「ピタリ」と著くる意なり、手を著くること密にならざれば效少な
し或は效なし今左に其理由を示さん
靜脈は筋肉の内及筋間組織中を通りて末梢より中樞に向ひ還流
することは既に前に之を言へり此兩種(筋内中及筋間組織中)の靜脈管相互の
間には多數の側枝管ありて交通自在なり今筋の一部を壓すれば
其部の靜脈管も壓縮せられて管内の血液を前後左右に排出す、壓
を去れば靜脈管は組織と共に(ゴム管に均しきが故)其弾力性によ

りて故形に復し其空虚なる管内には前後左右より血液還流し來
る故に一部を壓するのみにては幾回反覆するも同じき血液が其
部を出入するのみ之中樞に送るの效なし又筋の一部を末梢よ
り中樞に壓し行くとするも左右に排出せる血液進み行く手の後
に直に歸り來り是又之を中樞に送るの效なし故に按摩を有效な
らしむるには血液をして獨り只前方即中樞に流れ去り進み行く
手の後には獨り只後方より血液の進み來る如くせざる可からず
此れには上の如く筋の一部を壓し又は一部を壓し行くことをな
さず筋の全幅を中樞に向て同時に壓し行き兼て其兩側にある筋
間組織をも同じく密に壓し行かざる可からず西洋按摩の特色は
茲にあるなり

筋と静脈との關係は體部によりて各異り故に各論に於て一々之を詳述し茲に之を言はず只按摩する者は按摩すべき體部の組織には高野豆腐に水の浸める如く液體含まれあり此液體を一滴も剩さず悉く中樞に向て榨り出す如く心得て手を著くれば初て奏效するものと考へよ實際又然り

二 揉捏法

輕擦法は平手を用ひ筋を下牀に向て壓し行くものなれども揉捏法は之と異り兩手を用ひ一方は拇指一方は他の四指との間に筋を把り壓榨しつゝ上行するものなり患者は按摩すべき筋を横にして術者に供し術者は此筋の末梢端に略十字形に其兩手を加へ拇指と他四指間に筋を其兩側の筋間

組織と併せ把握し之を成るべく骨面より擡起し鋸截狀運動を以て上行す但し右手前に行くときは左手後に行き右手後するときは左手前し常に兩手反對に運動し行くなり輕擦法と同じく手と組織との間に隙あるべからず弛みあるべからず

用は輕擦法と一樣にして組織内の液を中樞に向て驅出するなり而して效は輕擦法より多し又鋸截狀に手を動かさず日本按摩のする如く一把一榨漸々上行するも可なり又筋の小なるものには拇示の兩指又は拇示中の三指を用ふるも可なり凡て手技は決して茲に述ぶる所を以て盡くるにあらず尙他に幾多もあり又按摩するもの自ら新に按出する

ものもあらん夫は決して妨げず要は只上記の目的に適ふにあり
揉捏するに肘關節を用ひず肩關節を使ふときは術者疲勞し易か
らざるの利あり

三強擦法又重擦法又摩擦法

強擦法は自然の新陳代謝に任せては治癒せざる或は治癒に長時
日を要する病的産物を細かく碎きて循環系に入れ之を體外に排
出するものなり即ち甲乙二技より成る甲は病的産物を細碎する
ものにして示指拇指を加ふれば更に強しを用ひ之を略鉛直に被
擦部に加へ皮膚をづらしつゝ指を深部に致し指尖を鋸截狀に運
動し又は速に小圓を畫く如く運動して病的産物を摩擦す病的産
物は漸次之によりて細碎せらる

一定時間此く摩擦して乙技に移る乙技は今細碎せるものを循環
系中に送り以て中樞に致すものにして輕擦法に外ならず他手の
示指又は拇示兩指を用ひ之を今去らんとする甲指の末梢部に加
へ肢の長徑に沿うて擦上するなり
被擦部は必ず固定すべし動けば效少し此手技は力を用ふること
強きが故皮膚を擦傷し易し故に手技の前後に少許のワゼリン塗
布を行ふべし此手技を行ふには指及手の關節を強硬に保持し僅
に肘關節を動かし而して主に肩關節を用ふべし效多くして疲勞
少し

四叩打法

叩打法はタ、クなり叩打は強力を以てすべからず而して快速に

して甚だ弾力的なるを要す、日本按摩の叩打は怒て「タ・ク」の「タ・ク」に近く力強くして弾力なき手技多し、叩打に左の諸法あり、手背叩打 指を張り平手を仰がしめて可叩部に當て指と腕關節は成るべく動かさず主に肩關節を使用して叩打す、手拳叩打 拳は決して固く握らず半拳なるべし、半拳とは毬を握れる手と思はゞ可し之を覆せて用ひ又は豎て、小指側を以て叩打するも可し要は常に空氣毬を握り居りて叩打するものご心得るにあり自然弾力的の叩打を得べし、主に肩關節を使用すべきは前に同じ

又日本按摩の頭に行ふ手拳叩打法又可し即ち前項の覆せて用ふる法に似たれども茲には叩打するに指背を以てせず指頭を以て

し物を搔き寄せせる如く叩打するなり、指根關節の外は矢張肩關節を主に用ふべし

叩打法は主に筋の萎縮を治し及諸種の疼痛を鎮壓す、皮下淺き處の神経痛の如きは醫の打診する時の如く中指頭を用ひ腕關節を

使うて叩打することあり

五 振顫法

は學び易からず如何に快速に手を動かしても故意の運動は振顫にあらす、振顫は瘰癧を患ひたる時又は物に怖れたるときの振顫と同様にして反射的即ち不隨意ならざるべからず只之と異なるは按摩の振顫は随意に起し随意に止ることを得るにあり

之に平手振顫法と指尖振顫法とあり、兩者とも前膊を上膊に對し

て殆ど直角に曲げ指及手を成るべく強硬にし肘關節より前膊全部を正調の振顛に委す善く精神を此手に籠むるときは自然に振顛を得べし

第四章 自力及他力運動

按摩法にあらざれども常に按摩法と共に用ひらるゝが故按摩する者の必ず心得置くべきこと尙一あり自力及他力運動是なり患者自身をして其某關節を運動せしむるを自力運動といひ按摩するものが患者の肢節を把てこの關節を運動するを他力運動といふ
同じく此に屬すれども少しく趣を異にせる反抗運動といふあり、

筋力を強うするの效力著しきものなり之は自他兩力の併用にして自力運動し他力反抗し或は他力運動し自力反抗す今二頭膊筋を以て之を例せんに患者をして臂を伸ばさしめ術者は其手を以て患者の腕關節を把り患者に命じて臂を屈せしめ術者力を用ひて屈臂を妨ぐるは自力運動他力反抗にして患者に初め臂を屈せしめ置き術者同じく患者の腕關節を把り患者に伸臂を妨ぐることを命じ置きて伸臂するは他力運動自力反抗なり
術者は此際必ず力を平等にし決して撞突的なる可からず又常に善く患者の力量を量り患者に過勞せしむ可からず

第二編

各論

一 筋按摩法 二 關節按摩法 三 其他の按摩

第一章 筋按摩

之を四肢軀幹に分つ

第一 四肢筋按摩

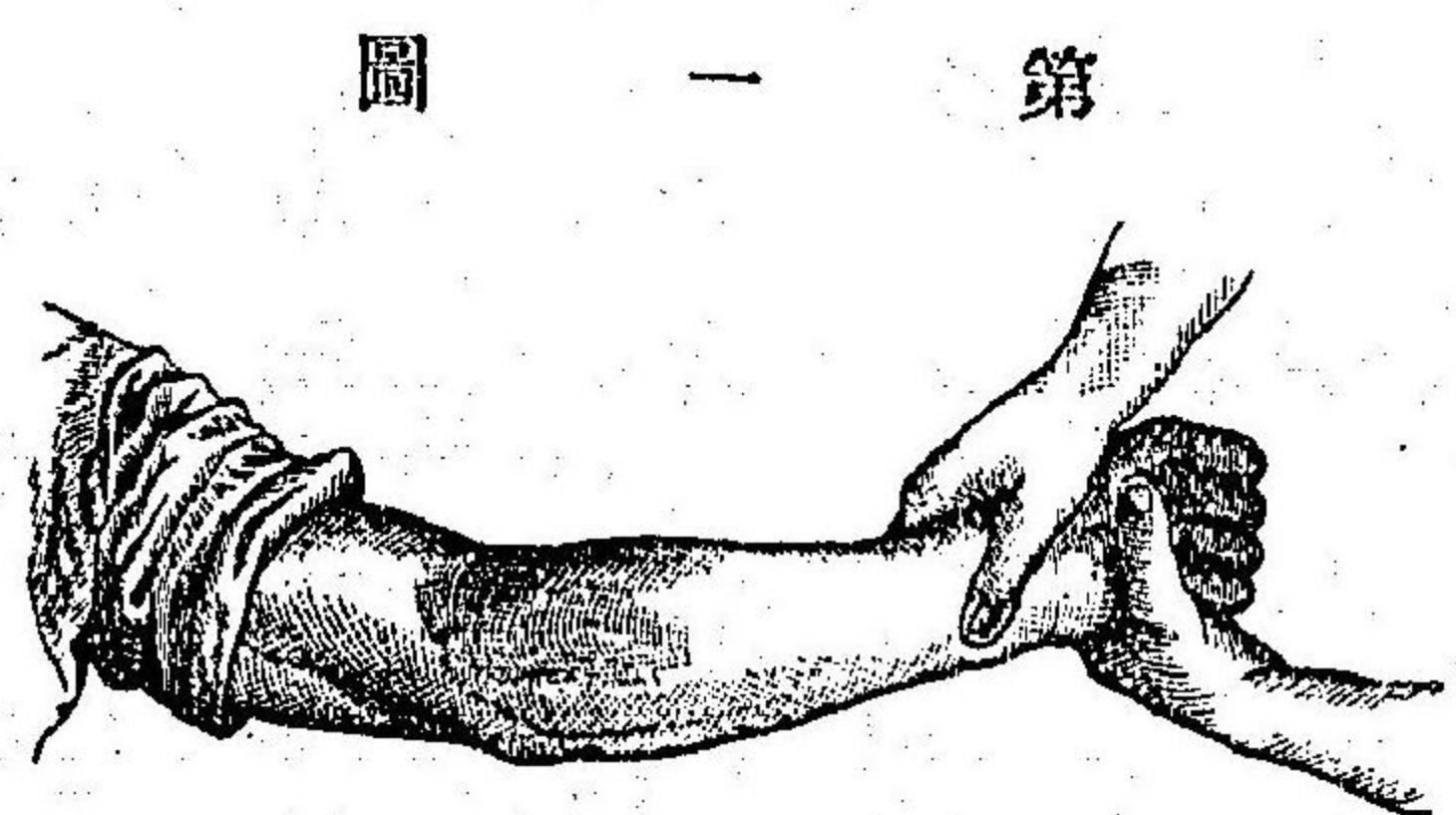
重複を避くる爲め常に右側を以て示す左側は只左右手を代ふるのみ

(天) 上肢

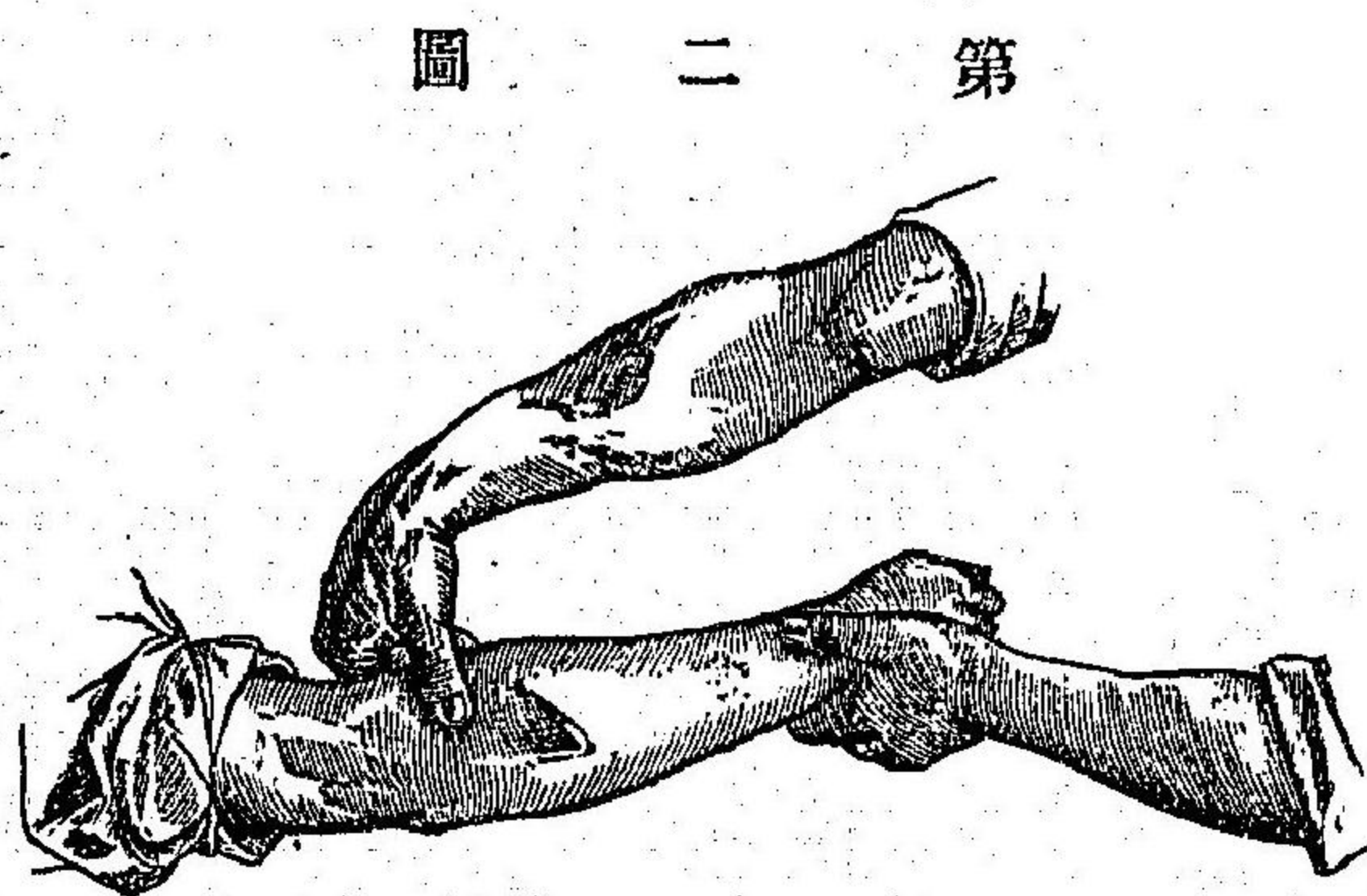
(イ) 前膊には著大なる筋間組織を以て分るゝ二筋族あり屈筋族及び伸筋族是れなり、屈筋族は掌側上肢を體に沿へて垂下し掌を前に向けたる位置に於て前側にあり尺骨に沿ひて肘關節の内側に至る伸筋族は背側同上後側にあり橈骨に沿ひて肘關節の外側に至る

輕擦法

伸筋族 患者をして斜に術者に面して坐し上膊を少しく體より放し少しく臂を屈げ拇指を上に向はしむ而して術者は其左手を以て患者の手を下より把りて之を支持し其右手を前膊の背側に加へ(第一圖)下より上に向て進み肘關節に到る此際拇指は尺骨を傳ひ他の四指は兩筋族間の溝を進み兩指肘關節の外側に相會し



第一圖



第二圖

に向け術者は前と同じく左手を以て支持し右手を以て按摩す即ち腕關節の上部掌側に著手し拇指は上記の筋間溝を傳ひ他の四

て終る第三圖の紫線其經路を示す
筋の端は細き故之を十分壓榨するには手掌を體面より放し腕關節を掌屈し拇示兩指の間に可擦部を挾むべし

(第二圖)

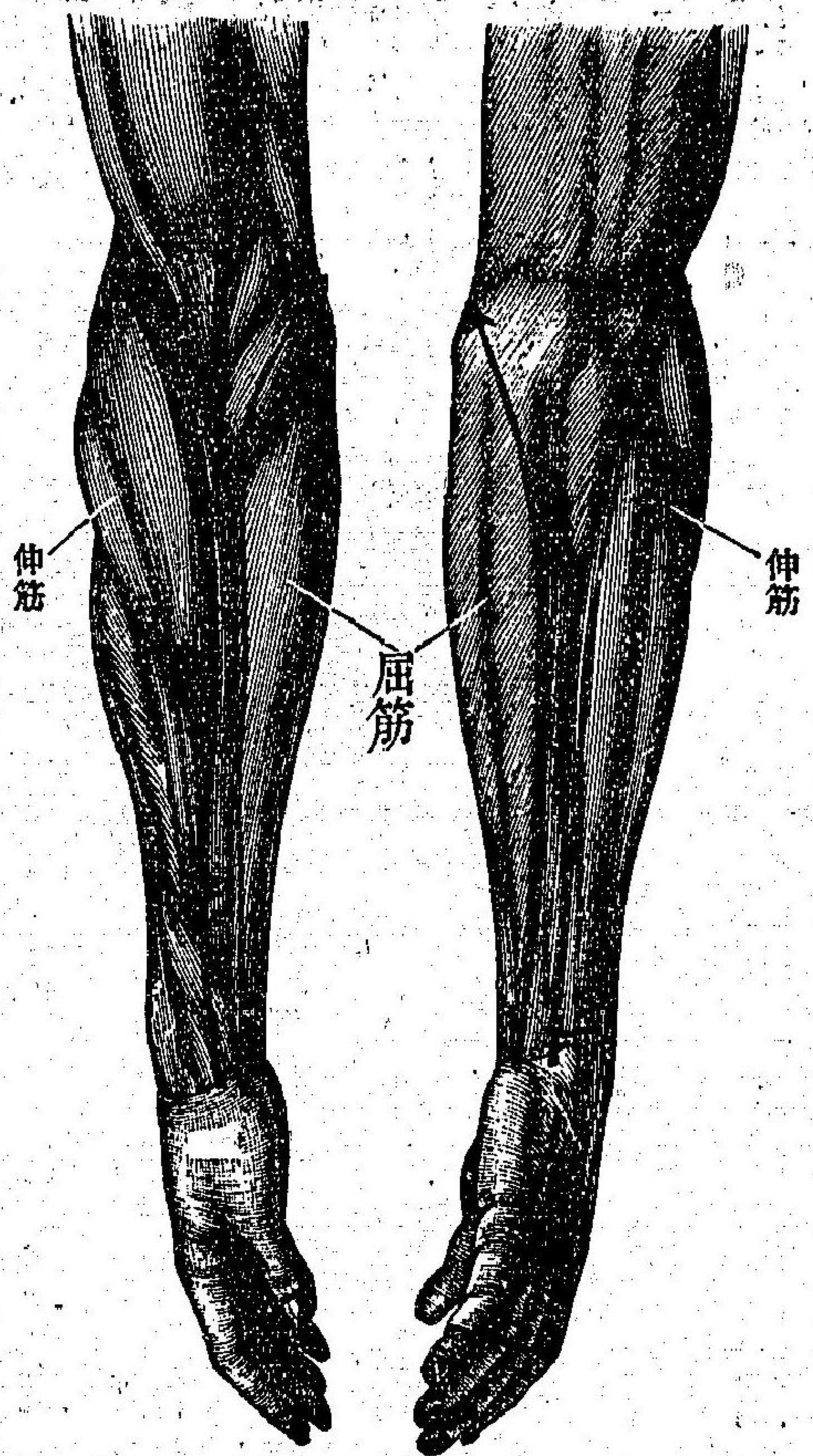
屈筋族 患者は術者の正面

に臂を伸ばし全く手掌を天

に臂を伸ばし全く手掌を天

に臂を伸ばし全く手掌を天

第三圖



指は尺骨骨を彼方に超すべからずを傳ひて上行し肘關節の内側に到りて兩指相會して終る第三圖の赤線其經路

を示す
各筋族の輕擦は三乃至四行にして十分なり他の筋に於ても大概然り

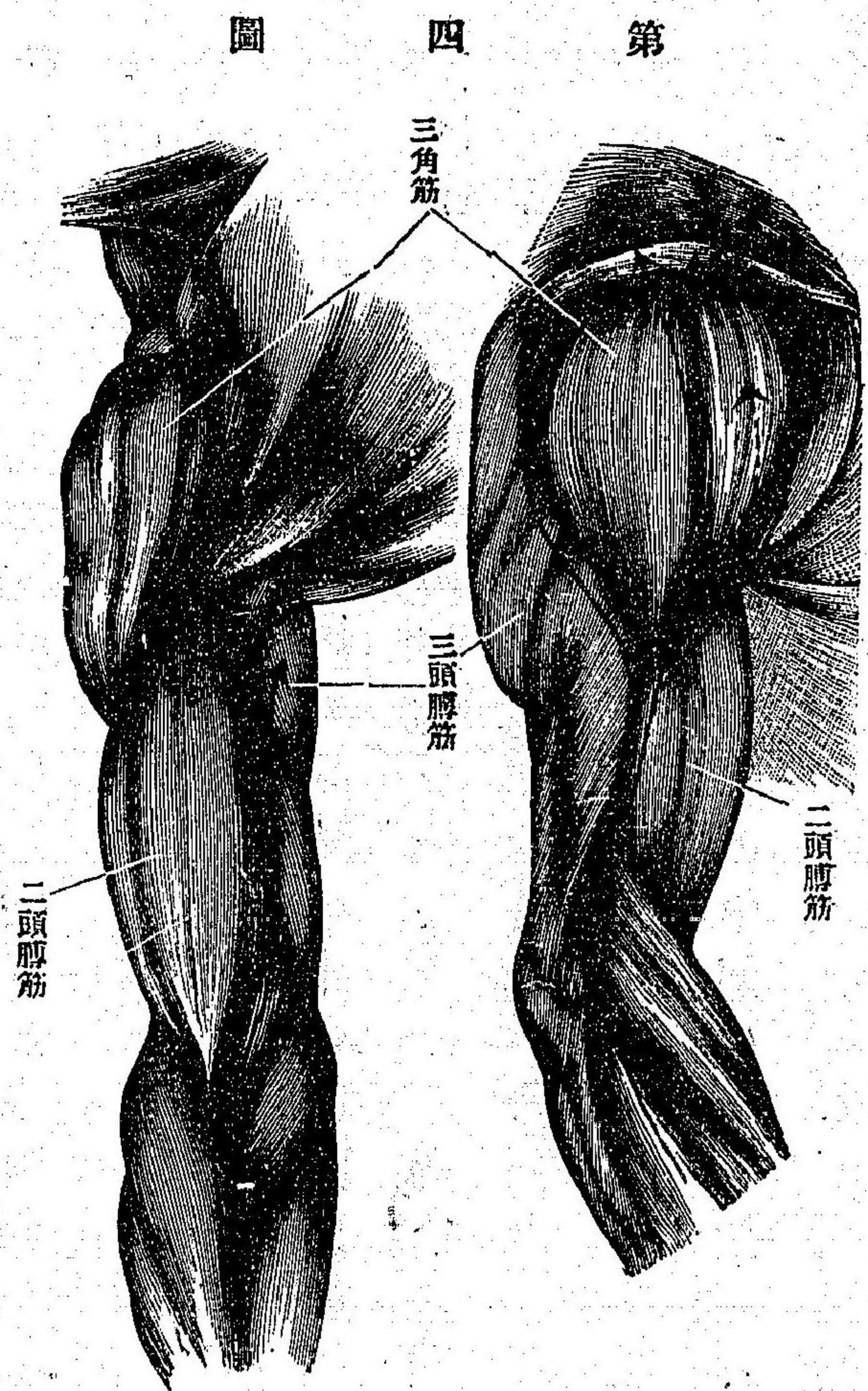
揉捏法

伸筋族 患者は肘を直角に屈し拇指を上向して術者に正面し術者は拇指と他四指との間に筋族を把取し成るべく骨面より提起しつゝ揉捏し以て肘關節の外側に到る

屈筋族 患者斜に面し少しく肘を屈して體に著け手掌を天に向く術者は患者の手を己が臍部に當てしめて之を固定し前の如く筋族を尺骨面より提起し揉捏して肘關節の内側に到る

按摩する指は輕擦法と同じく第三圖の色線を通り行く揉捏法には常に輕擦法を交へ用ふ即ち第一回の揉捏を終れば一回輕擦して初めて第二回の揉捏を行ひ復輕擦して揉捏し斯くするごと大概三回なるべし

(口) 上膊 には三筋族あり即ち二頭筋族、三頭筋族及び三角筋族と



二頭筋族 は上膊の前側にあり力瘤を成す所の筋なり肘は少しく曲く術者は左手を以て肘を支へて右手を肘關節の前面に加へ拇指は外二頭筋溝、他四指は内二頭筋溝を

二頭筋溝を

傳ひて上り三角筋に達すれば拇指其内縁に沿ひて進み腋窩に到りて兩指相會す(第四圖)

三頭筋族は上膊の後側にあり患者の肘は前に同じ術者は右手を以て前より肘を支へ左手を肘關節の後面に加へ腋窩に向て擦上す兩指は前記兩側の筋溝を傳ひ上り三角筋に達すれば拇指は其外縁他四指は其内縁を傳ひて腋窩に入り相會して終る(第四圖)三角筋族は上膊上部の外側にあり肩胛關節を覆ふ肩の圓みは此筋による三角の尖端は上膊の中部にあり此筋は廣くして一手にては按摩し難し故に二分して之を行ふ實際又縦に中央に筋間組織ありて之を二分す外半は左手内半は右手を以て按摩する方便なり手を三角尖端の下に起し拇指は中央を他四指は邊縁を傳

ひて上り肩上に兩指相會して終る
揉捏法は筋の所在をさへ知れば自ら行ひ得べし三角筋族は矢張二分して行ふべし

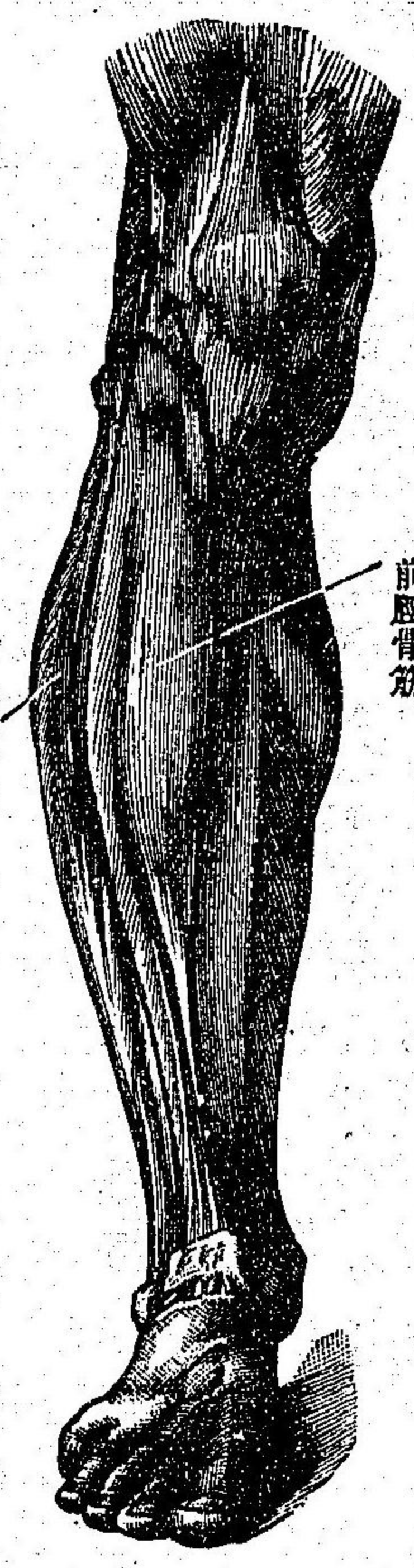
(地) 下肢

(4) 下腿 下腿の按摩には患者を臥せしめ一手踵を把りて支持し他手輕擦し揉捏には下腿を術者の膝上に載す

下腿には前脛骨筋族、腓骨筋族、腓腸筋族あり
前脛骨筋族(第五圖) 下腿の前側にして脛骨前縁より外方にあるものにして上は腓骨小頭と膝蓋骨の間に終る左手を用ひ之を外踝の内方に加へ膝に向て上る此時拇指(赤線)は脛骨前縁に沿ひ他の四指(紫線)は外踝の前縁より腓骨小頭の前縁に引けると假想す

る直線を傳ひ以て筋の終端に達し十分に之を壓権す
 但し此部には下腿筋膜とて甚だ強靱なる筋膜ありて普通の輕擦
 法のみにては效力十分ならず故に更に二三行の指蹠輕擦を加ふ
 指蹠とは拳を作りたる時の示指より小指に至る第一指節間關節
 の背面を並列

第五圖



掌に代用するなり腕關節を強く掌屈して指蹠を外踝の内方に加
 へ赤紫兩線間を上行す此際第六圖に示すが如く上るに従ひ漸次
 腕關節を背屈に移す力を用ふることに強からず指蹠柔軟に筋上を

せるものなり、
 指蹠輕擦は此
 指蹠を以て手

擦行すべし

第六圖

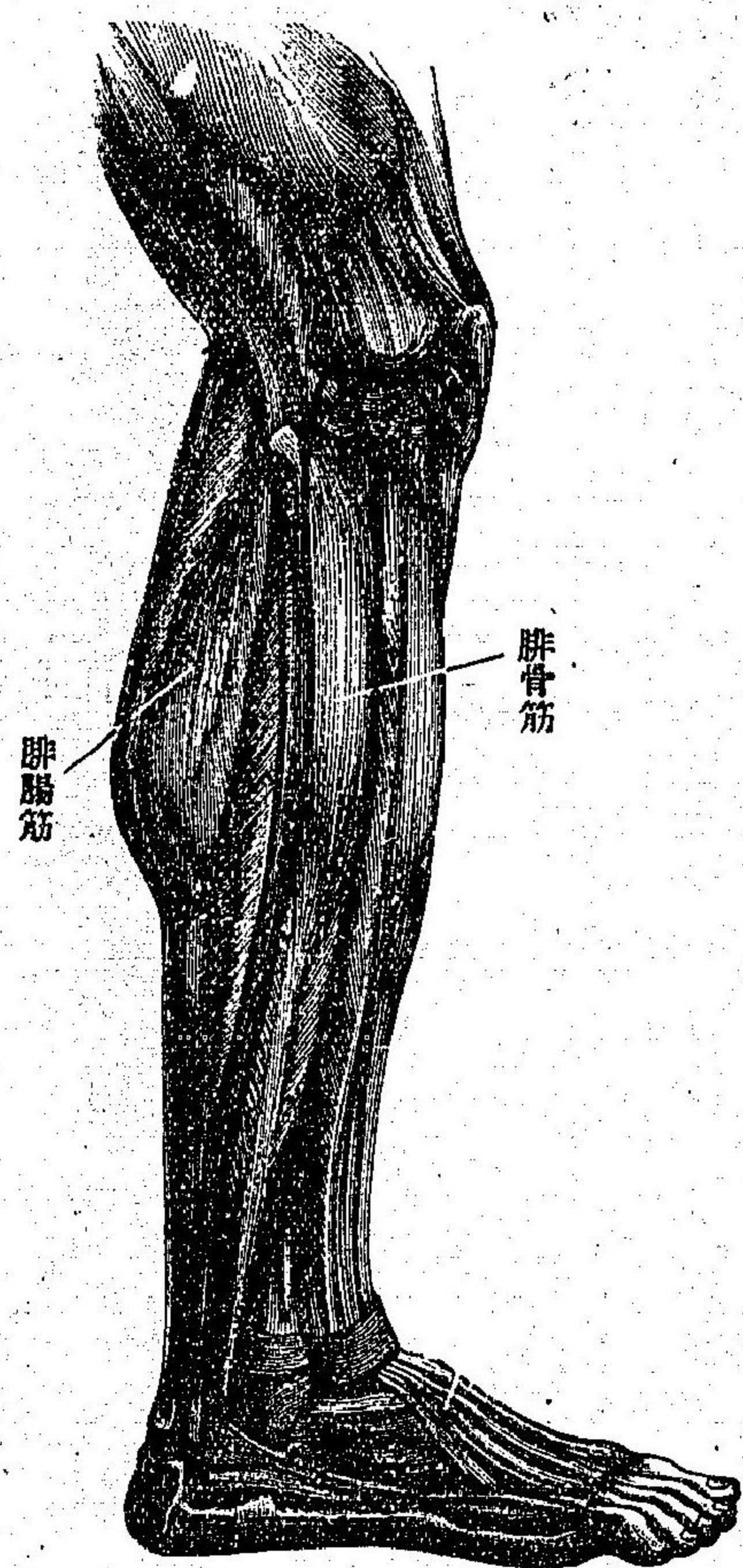


腓骨筋族(第七圖)は下腿の外側にして脛骨筋族と腓腸筋族との
 間にあり腓腸筋族との間には容易に探知し得る筋間溝(外踝の後
 縁と腓骨小頭後縁を連る直線に當る)あり上は腓骨小頭に終る手

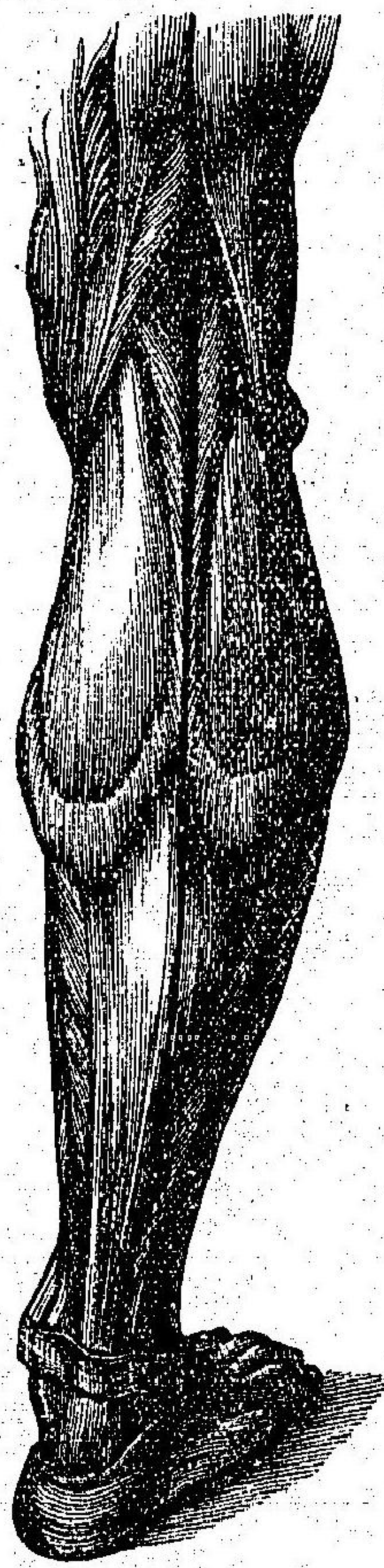
揉捏法も此強
 き筋膜あるが
 故二指揉捏な
 ることを要す
 而して指蹠輕
 擦を夾用すべ
 し

を外踝の後方に起し拇指は赤線第五圖の紫線に同じを傳ひ他の

第七圖



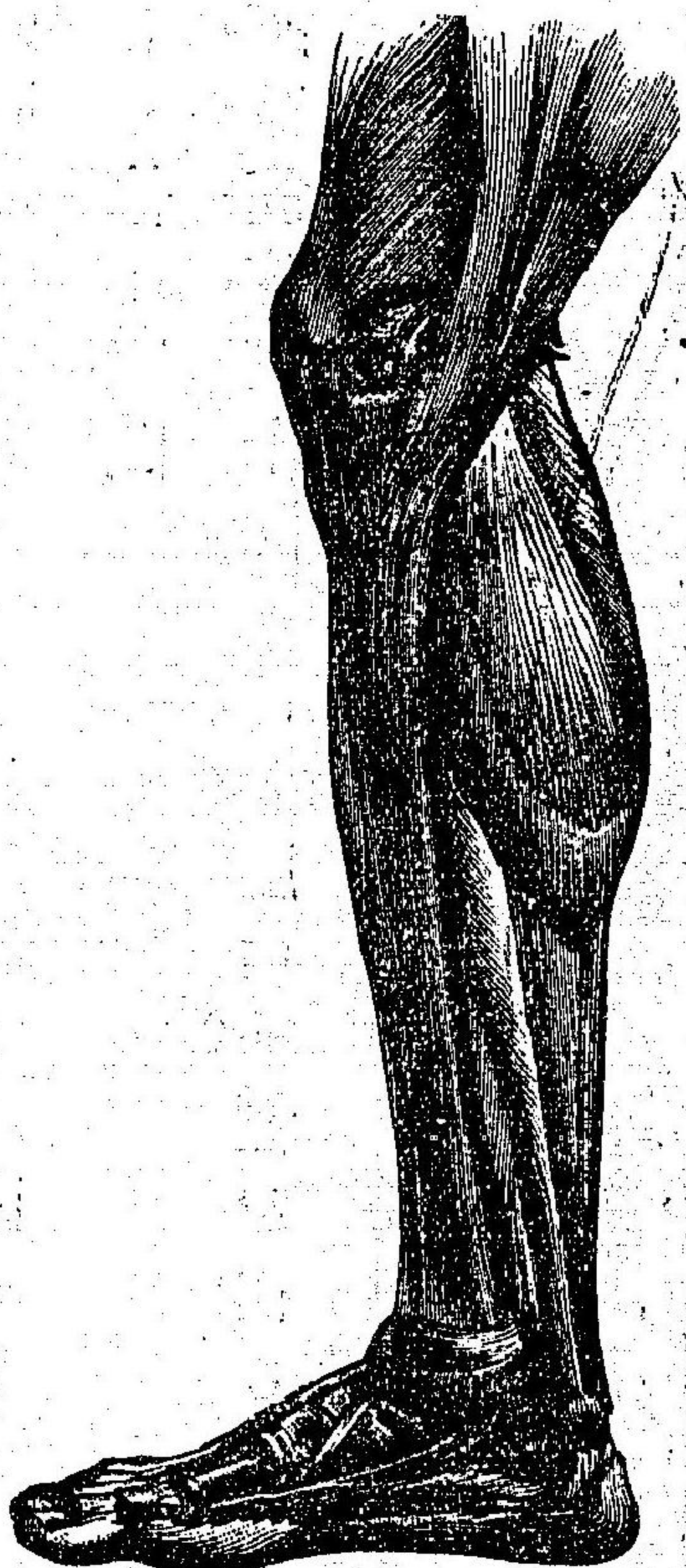
第八圖



四指は紫線筋間溝を傳ひ上腓腸筋族第八圖は下腿の後側を占領する厚大の筋なり之を縦に二分して按摩す筋族の外半は

左手按摩す之を踵に接して下腿に加へ拇指は前記筋間溝を傳ひ他四指は初めアヒリス腱を次に筋の中線を傳ひ終りに腓腸筋兩頭間の深溝を上りて膝窩の中央に於て兩指相會す

第九圖



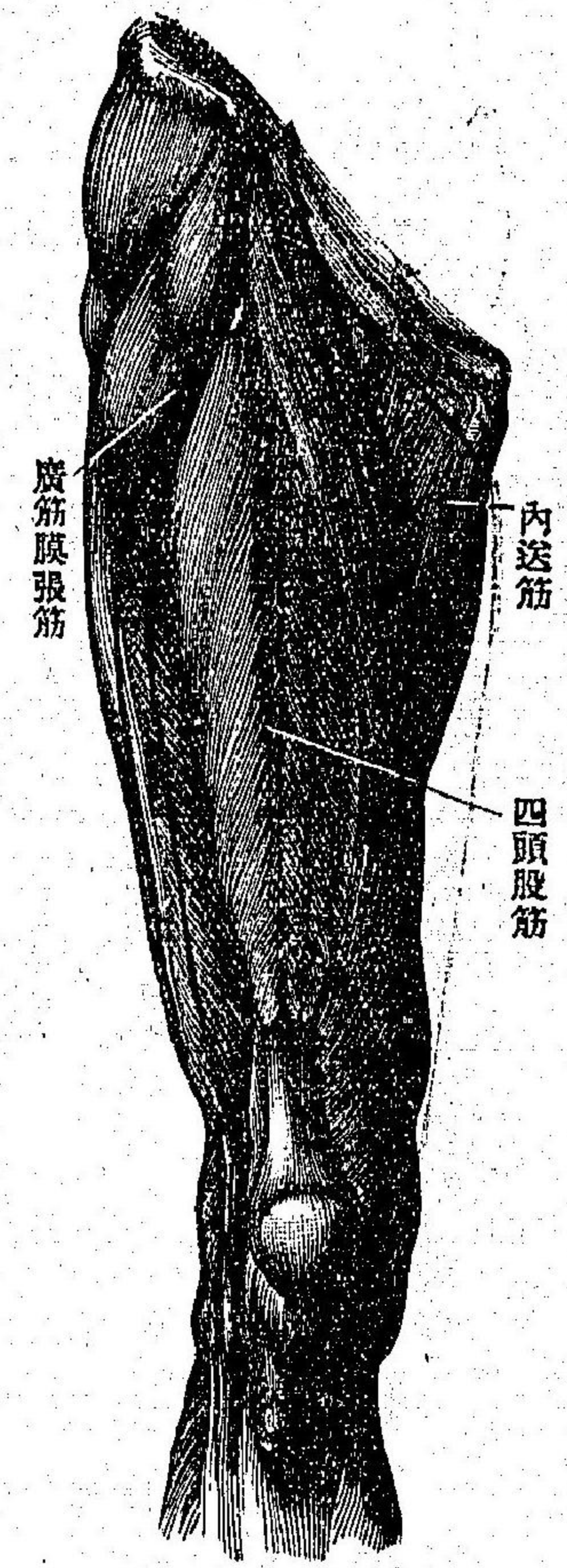
指は外半に於ける他四指の経路を傳ひ膝窩に入る各筋族の揉捏法は輕擦法と同じ順序を以て行ふべきのみ

筋族の内半は右手を以て按摩す(第九圖之を下腿下端の後面に加へ拇指は脛骨内縁を傳ひ他の四

(四) 大腿に分ちて按摩すべきは四頭股筋族、内送筋族、廣筋膜張筋族、二頭股筋族、半腱狀及び半膜狀筋族、臀筋族なり
 四頭股筋族及内送筋族の患者を仰臥せしめ廣筋膜張筋族は側臥せしめ他は腹臥せしめて按摩す

四頭股筋族第十圖は大腿の前側を占む右手を用ひ之を膝蓋骨の下に加へて擦上す膝蓋骨の處は掌面を浮して之を壓迫することを避け之を過ぐれば復掌面を密著す拇指は膝蓋骨外縁と大轉子尖

第十圖

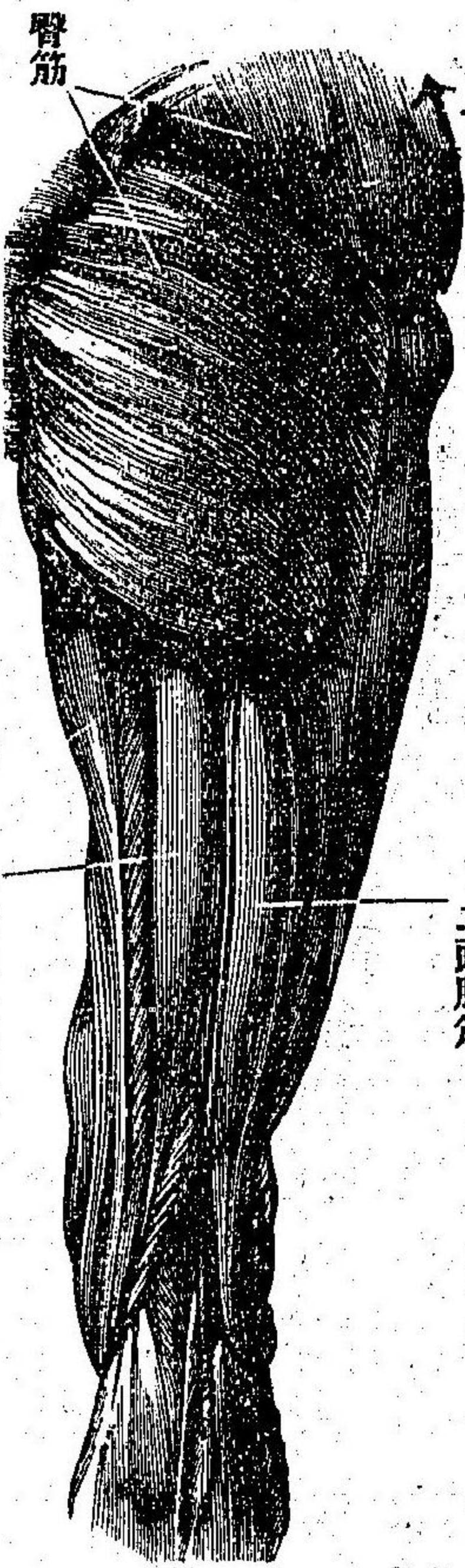


端とを結合する假想直線を他の四指は同骨内縁と腸骨前上棘とを結合するの假想直線を傳ひ行き兩指前上棘に於て相會して止む
 内送筋族同上圖は大腿の内側にあり患者は膝關節及股關節を少しく屈す術者は右手を用ひ拇指はかの膝蓋骨内縁より前上棘に引ける假想線を傳ひ他の四指は脛骨内髁より恥骨縫際下縁に引ける假想線を傳うて上り而して恥骨縫際下縁に達すれば指は是より鼠蹊を傳うて外上方に行き前上棘に於て拇指と相會す
 廣筋膜張筋族同上圖は大腿の外側に位し紡錘狀の筋腹をなす患者をして左側を下にして臥せしめ術者は右手を用ひ拇指は腓骨小頭の後縁より大轉子の後縁に向て上り他の四指は同小頭の

前縁より大轉子の前縁に向て上り同じく前上棘の處に於て相會す此筋は厚き筋膜を被むるが故平掌輕擦の後指髁輕擦を加ふ又揉捏も二指揉捏法に頼る

二頭股筋族(第十一圖)は大腿後側の外半を成す患者は腹臥す術者は左脚の方に坐し右手を用ひ之を膝關節の下部に於て下腿に

第十圖



小頭より大轉子後縁に引ける假想線を傳ひて上り臀皺襞に到り

加へ拇指は膝關節の中央より大腿後側の中央を上り他の四指は腓骨

て兩指相會す

半腱狀及半膜狀筋族(同上圖)は大腿後側の内半を成す術者は右脚の方に坐し左手を用ひ膝關節の下半部に擦行を起し拇指は大腿後面の正中を上り他の四指はかの脛骨内髁と恥骨縫際下縁とを連ぬる直線を傳うて行き拇指は臀皺襞に達したる後之を傳ひて恥骨縫際下に到り此處に兩指相會す

臀筋族(同上圖)は臀頰をなす患者は同じく腹位にあり臀筋の纖維は二様に走る一は大轉子より斜に薦骨に行き一は大轉子より鉛直に腸骨櫛に行く故に按摩も二様に分け行はざるべからず術者は患者の左側に坐し右手を用ひて按摩す手を大轉子の下に加へ大轉子の處(膝蓋骨)に於けるが如くを免じて先づ薦骨に向て擦

行す、拇指は此時腎皺襞を傳ひて尾閭骨に到り他の四指は大轉子
 尖端より腸骨後上棘に引ける線を傳ひて進み此處に相會し更に
 復手を大轉子下に起し拇指此線を傳ひ他の四指は腸骨前上棘に
 向て進み此處より更に腸骨櫛を傳ひ行きて拇指と相會す
 揉捏も此纖維の方向に従ひ二様に行ふ

第二 軀幹筋按摩

(天) 背部

分けて按摩すべきものは脊柱伸筋、潤背筋、僧帽筋の三族なり
 脊柱伸筋族は脊柱に密接して其兩側に存する長筋なり患者は
 腹臥し兩上肢を張る術者は患者を跨ぎて跪き兩側の筋を同時に
 按摩す手を肩と頸との間に加へ兩拇指球をして第七頸椎棘状突

第二十圖



起に接せしむ手は斯くして下る、此際拇指は漸々相離れ其代りに

他の四指尖相近き
 主に示中兩指を以
 て棘状線に沿ひ擦
 下し薦骨部に達す
 れば方向を轉じ腸
 骨櫛を傳ひて鼠蹊
 に到り止む第十二
 圖左側黒線次に手
 を鼠蹊に起して擦上す手指の排置は下行の時のを戻すのみ而し
 て肩と頸との間に達するときは更に手を進めて胸鎖關節の處に

到る四肢の如く一方にのみせず上下に擦行するは循環の模様四肢と異り静脈上下に向け流るゝが故なり
 脊柱伸筋は所在深く且厚き筋膜を被むるが故平掌輕擦數行の後二三の指輕擦を加ふるを要す又揉捏も二指揉捏ならざるべからず日本按摩は拇指を以て筋肉を棘狀突起より離す如く按摩す即ちグリーンと筋肉を棘狀突起と横突起との間の溝中に揉み捏るなり有力の揉捏法なり
 潤背筋(同上圖)は腰部より上膊上端に至る扁平の筋なり右側を按摩せんには患者の左側に坐し右手を用ひ腰の下部に加へ拇示兩指を出來得るだけ張り示指は腸骨楯に拇指は腰椎下部に接して擦行を始め拇指は脊柱に沿うて上り最下背椎に達すれば斜に

腋窩に向ひ他の四肢は起點より直た腋窩に上り兩指此處に達すれば筋狹小となるが故掌を體面より放し腕關節を掌屈して之を壓榨し以て終る
 僧帽筋(同上圖)は髮際より第十二背椎に至るの脊柱より起り肩胛棘及肩峯に集中する三角形の筋にして中部は纖維地平に走り上部は斜に下方に下部は斜に上方に走る故に三様に按摩す
 下部筋の下角を拇指と他四指の間に取る如く手を置き拇指は第五胸椎まで脊柱を傳ひ行き此處より外方に向て肩峯に到り他四指は漸く開張しつゝ上りて肩胛棘の始端に到り此處より同じく外方に向て肩峯に行き此處に兩指相會して終る
 中部手を脊柱と直角に交叉して第一乃至第六背椎に接して置

腕關節棘狀線と竝行し且之に一致す肩峯に向て擦行す
 上部 拇示兩指を極度に開張し拇指を鉛直にし其根部より示指
 の拇指側を髮際に密接せしめて擦行を始む擦行は筋の纖維に従
 ひ弓狀凹面上外方に向ふをなす拇指は此際中線を降りて第一胸
 椎に達し此處より方向を轉じて肩峯に到り此處に他四指と會合
 す
 潤背筋及僧帽筋の揉捏法 筋扁平廣潤にして之を下牀より擡起
 し難く普通の揉捏は行ひ難し故に此處には平手を用ひ先づ潤背
 筋の起始部に當て成るべく皮膚を共に移動しつゝ右より左に左
 より右にと揉捏して上行し筋狭小となり下牀より撮み上ぐるこ
 とを得る處に到れば普通の揉捏法を行ふべし僧帽筋も同じ其上

部弓狀をなす處は擡起し得べし
 背部には叩打法を加へて效多し之を下部に始め腋窩線に沿うて
 上り少しく中線に近き上より下に叩打し更に一步中線に進みて
 下より上に叩打し斯くの如く上下叩打して漸く脊柱に近き之に
 達して止む肩胛棘及脊柱は叩打すべからず患者に徒に痛を感ぜ
 しむ

(地) 胸部

按摩を要すること少し中に就て屢其要あるは大胸筋なり大胸筋
 の纖維に二様あり一は鎖骨より上膊に向ひ一は胸骨より上膊に
 向ふ故に二様に平手擦行を行ひ共に腋窩に向ふ乳頭は免ずべし
 揉捏は背部に於けると同じ或は二指或は平手を用ふ

稀に按摩を要することあるは前大鋸筋及肋間筋なり前大鋸筋は胸廓前面に於て第二乃至第九肋骨より起り肩胛骨内面を過ぎて其内縁に附著する筋なり之を按摩するには患者をして手を背に廻はし手背を腰椎上に置かしめ肩胛骨を體より離し按摩をする手をして其内面に入り易からしむるなり術者は手を前腋窩線に於て腋窩の下部に置き斜に後上方に擦行す揉捏も平手に依る肋間筋を按摩するには示指を用ひ之を其按摩すべき肋間に加へ肋間を傳うて輕擦揉捏す揉捏には小環狀運動をなすべし

(人) 頸部

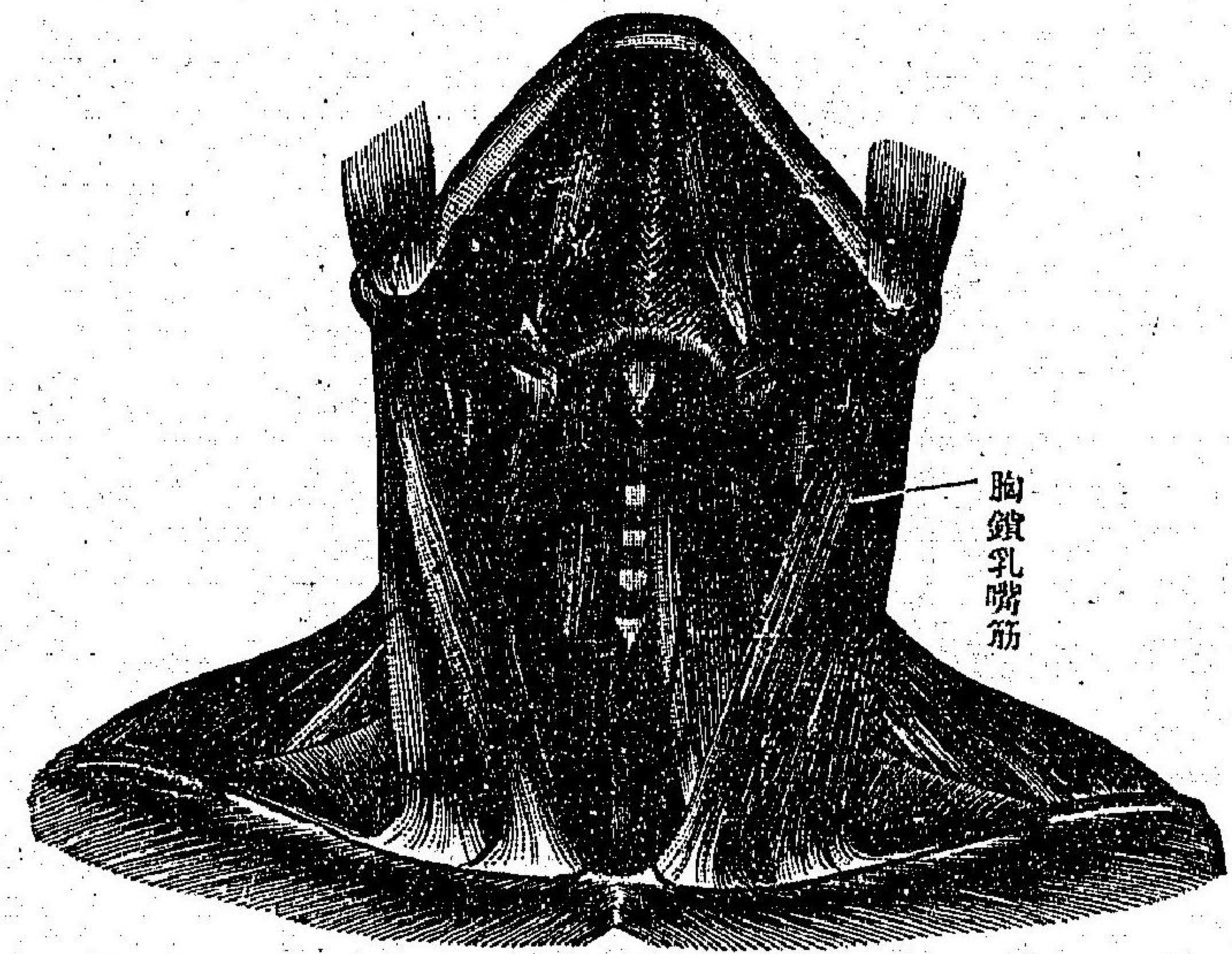
にて按摩すべきは胸鎖乳嘴筋なり筋は乳嘴突起に起り胸骨の上縁及鎖骨の内端に附著し此筋の外面及内側には頭首より來る凡

第三十圖



ての靜脈あり故に此筋の按摩は頭蓋顔面の内外咽喉頭等の充血を減じ炎症を消散するの效あり患者は上半身を裸して術者に面し術者は稍高き方よろし故に或は跪くべし患者に命じて靜に且深く呼吸(此事既に頭首の充血を去る效あり)せしめ且頭首を少しく後に傾け肩と腕を緩めて其下垂に任せしめ術者は四肢を收め左右均しく之を平に頸側に加へ示指の尖端を乳嘴突起其拇指側を下顎隅角に接す(第十三圖)斯くして指尖を漸く中線に近くる如く手を廻しつゝ

擦下す此際示指は筋の内縁を他三指は筋の表面を下る是迄少し



胸鎖乳嚢筋

第十四圖

く覆せたる手は示指の尖端甲狀軟骨に達すると同時に全く覆せて下行し頸切痕に達するや中指尖を軸として手を廻旋し殆ど前と直角にし中環兩指頭を以て鎖骨の上縁を傳ひて其外端に到り止む第十四圖特に僕麻質斯性斜頸の時の如く此筋の爲に按摩するときは更に揉捏す之には頭首を軽く前方に屈せしめ筋の弛緩

したるところを拇指と他四指との間に取るなり
喉頭には頸部按摩の終りたる後尙振顫法を施すことあり甲狀軟骨を示指と拇指との間に軽く夾みて振顫す

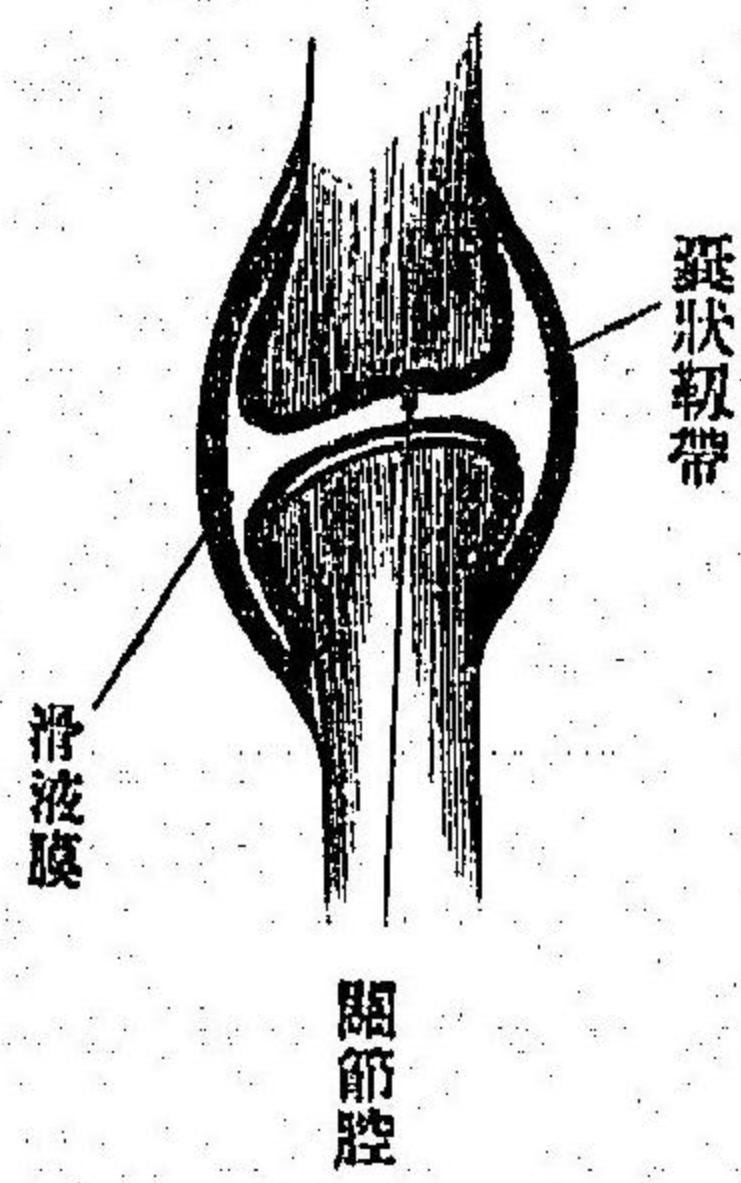
第二章 關節按摩

關節に疾患あるときは其關節より中樞にある所の筋例へば肘關節にありては上膊の筋膝關節にありては大腿の筋削瘦す就中伸筋最強く犯さる即ち腕關節には前膊伸筋族肘關節には三頭膊筋肩關節には三角筋足關節には前脛骨筋族膝關節には四頭股筋股關節には臀筋なり此筋の削瘦を防ぎ又は回復するに筋按摩を施すべきは勿論なれども此際には筋按摩のみにては效十分ならず

關節を併せ按摩するときは奏效十分なり故に看護人は又關節の按摩をも知らざるべからず

關節にて按摩すべきものは囊狀靱帶關節囊とも云ふなり囊狀靱帶第十五圖は一方の關節骨より起り他方の關節骨に附着し全く關節を囊包する堅靱の膜にして關節内面を被覆する滑液膜を以て内面を被はる滑液膜は滑液を分泌して恰も車輪の油の如く關節の轉動を利す

第五十圖



關節疾患に罹るとき又は關節を一定位置に長時固定するときには滑液膜の相對する面癒著し及び囊狀靱帶肥厚短縮すること多し又之と反對に若し關節腔内に滲液增多するときには囊狀靱帶延長

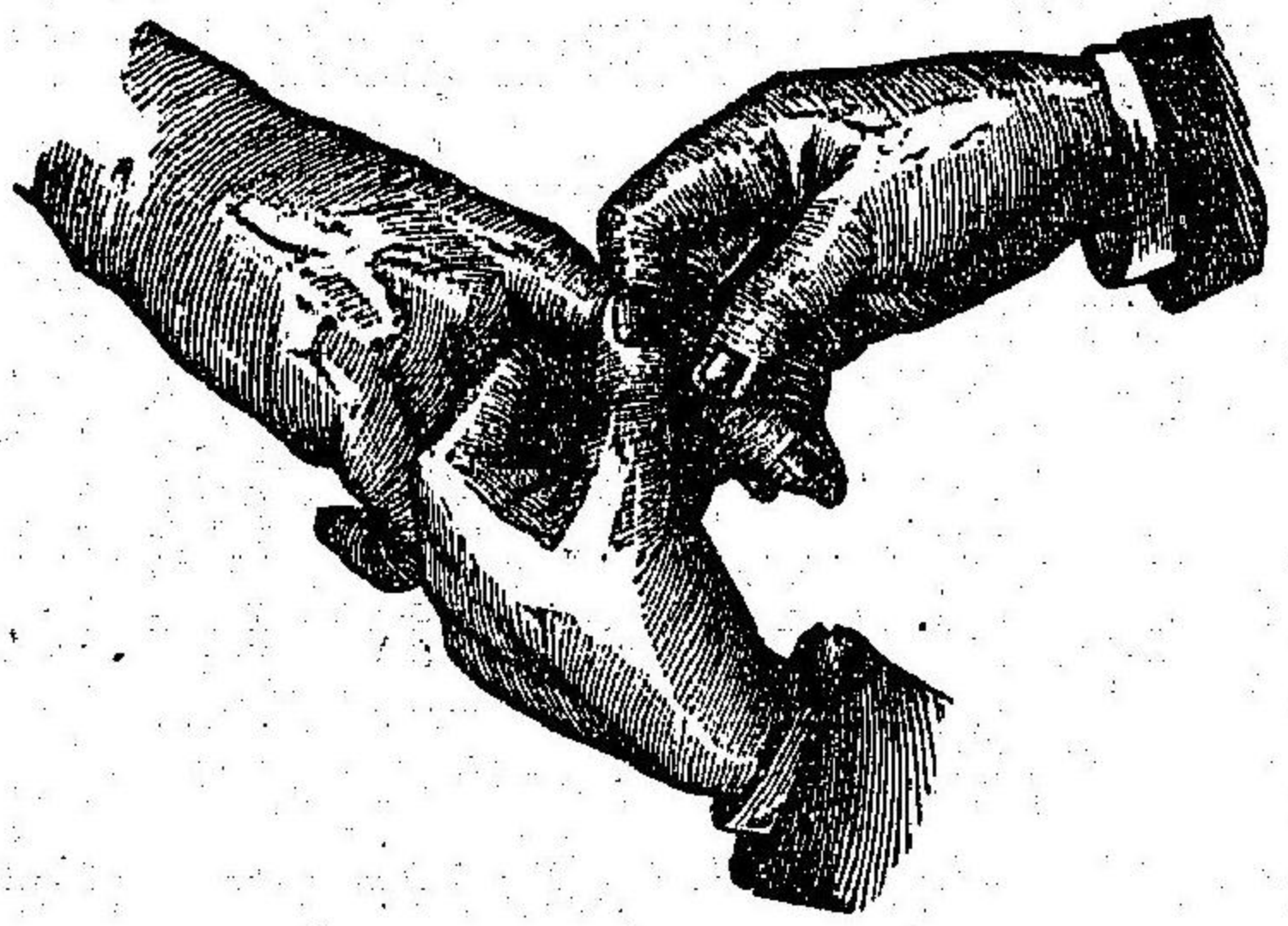
す囊狀靱帶短縮するときには關節運動不十分となり囊狀靱帶延長するときは關節の固定不十分となる膝のガク／＼するが如し

按摩は此短縮せる囊狀靱帶を延ばし滑液膜の癒著を剝離し又延長せる囊狀靱帶を短縮するの效あり

關節按摩は囊狀靱帶の揉捏及び強擦なり然れども關節周圍には筋腱其他のものありて直に之を觸れ得ず故に按摩する者は各關節に就て如何にせば最囊狀靱帶に近寄り易きかを知らざるべからず今之を左に示す但し常に輕擦法を加ふるは言ふ迄もなし指關節及腕關節指は一本宛先づ環狀輕擦を行ふ右手の拇指と示中兩指を用ひ指尖より指根に向ひ屋瓦狀に重疊する輕き環狀擦行を施す次に兩拇指の指尖を用ひて強き擦行第十六圖を加ふ

同じく屋瓦状に重疊して指尖より指根に到る

第十圖



次に二指揉捏を兩側の軟部に行ふ左右の拇指兩指間に之を取り指尖より指根に交々揉捏し行く即ち左側を揉捏するときは右側を緩め右側を揉捏するとき左側を緩むるなり成るべく骨面より提起して壓榨す

強擦法を行ふ此關節は只背側を強擦す法は總論に述べたるを以て重ねて言はず只掌指關節の處は中央に走る腱を左右に押し遣りつゝ按摩すべし

終りに他力運動を行ふ即ち左手を以て關節の中樞端を把り右手を以て其末梢端を取り屈伸運動を行ふ初めの間は極めて軽くし後には漸く用力を大にし且兼て關節を引離すの運動日本按摩の行ふ所をなすべし

腕關節の按摩 先づ手背及び手掌の按摩を行ふ手背を按摩せんには患者の手掌を術者の左手に受け右手を平に手背の手根部に當て輕擦し上り腕關節を越え前膊の伸筋族に移る莖狀突起の所は手を浮すべし斯くすること數回にして兩拇指を用ひ伸筋腱を一々揉捏す若し硬結等あるときは強擦法を加ふ尙骨間筋各掌骨間にありを按摩す之に示指の尖端を用ひ患者に命じて成るべく指を開張せしめ骨間の末梢部より中樞に向て擦行す成るべく指

尖を深く入れ左右に揉捏しつゝ行くなり又相隣れる兩掌骨を兩手の拇示兩指間に把り彼此移動(掌側背側)するも效多し
手掌 先づ指髁輕擦を行ふ左手を以て患者の指を把りて支持し右手の指髁を用ひ指根部より腕關節に擦行す次に兩拇指を用ひ用力を大にして屈筋腱の按摩を行ひ手背と同法終りに拇小兩指球の揉捏を行ふ筋を成るべく骨面より提起すべし
手背手掌の按摩を終らば患者をして指の自力屈伸を營ましめ次に反抗運動を行ふ反抗運動中特に注意すべきは骨間筋なり一度は患者に指を開張せしめて術者之を斂著せんと試み一度は術者指を斂著して持し患者に命じて之を開張せしめ兩回とも術者漸く其力を緩めて患者の運動に順ふなり

斯くして初めて腕關節を按摩す先づ平手輕擦法を行ひ一度は手を覆せ一度は手を翻へし共に指根に起り腕關節を越え手背のは伸筋族手掌のは屈筋族を處して肘關節に到る斯くして腕關節強擦法に移る關節囊の達し易きは兩側と背側なり強擦する手は之を一側に始め漸次進んで他側に達す屈筋腱のある處は之を移動して強擦し剩すところ無き様注意すべし又兩手の拇示兩指を用ひ兩側より始め中線に於て相會すれば更に中線を越え此指は彼側に彼指は此側に進み關節の兩側に到りて止む斯くすれば同時に關節の掌側をも按摩し得るなり
強擦法の後に輕擦法(前に示せる)を加へ後に他力運動を行ふ左手

を以て患者の前膊を腕關節の直上に於て支持し患者の五指を右手の拇指と他四指間に軽く決して強かるべからず把り關節を背屈掌屈橈尺屈及び翻覆す又自力に此運動を營ましむ

肘關節 關節囊に達し得るは鶯嘴突起の兩側橈骨小頭の邊及屈側に於て纖維膜中線と内髁突起の間の下とす此處に強擦法を行ふ是れに先ち關節の輕擦を行ふ即ち手を前膊に起し關節を越えて一度は三頭膊筋一度は二頭膊筋を按摩す斯くして患者は先づ關節の背側を供す而して術者は鶯嘴突起の兩側より起り其尖端に進み更に三四指横徑上行す次に鶯嘴突起の兩側より内外髁突起に向て行ふ於是患者前膊を轉じて其橈側を仰向け以て橈骨小頭の關節外髁の下に手を置き前膊を翻覆せしむれば容易に此關

節を觸れ得べしを按摩し次に屈側に移る患者をして臂を屈せしむれば中央に二頭膊筋の臆緊張して明に觸る示指を以て其内側深部に入る

其後輕擦法殊に三頭膊筋及び自力他力運動を行ふこと腕關節に於けるが如し

肩關節 三角筋に強き輕擦及び揉捏を行ひて後強擦す此關節の囊狀靱帶は前側は烏喙突起の下後側は肩峯後角の下下側は腋窩上側は結節間溝に於て觸れ得べし故に強擦法を行ふこと下の如し患者をして手を背に廻はさしめて前側を按摩し手を健側の肩に致さしめて後側を按摩し手を術者の肩に載せしめて腋窩を按摩し兩手の拇指を用ひて強擦し他の四指を以て兩側より骨頭を

支持すれば最もよし終りに肢を垂れ三角筋上より結節間溝を索
 め此處に通ずる二頭筋筋腱の兩側に於て按摩す
 輕擦を各強擦間に夾み終りに自力及び他力運動を行ふこと他處
 に於けると同じ運動は前後の運動外放廻旋及び輪狀運動とす
 足及足關節 手のものと略く同じ即ち各趾に就て輕擦し次に趾
 節關節の強擦及び趾軟部の二指揉捏を行ひ次に足背に輕擦し前
 脛骨筋に移りて膝關節に達し兩拇指を用ひて足背腱を按摩して
 足關節の按摩に移る
 手を足背に起し各踝の下を通りて關節を環り一度は前脛骨筋族
 一度は腓腸筋族に移行するの輕擦を行ひ而して後強擦す
 足關節の囊狀靱帶は四周到達し得殊に前側伸筋腱の兩側及び後

側アヒレス腱の兩側最も易し故に強擦をアヒレス腱の一侧(後側
 を按摩するときは足を蹠屈し前側を按摩するときは足を背屈す)
 より強擦を始め踝の下を過ぎて足背に出で關節線を横行して他
 足の踝下を過ぎてアヒレス腱の他側に到る即ち關節を一周する
 なり前側伸筋の兩側後側アヒレス腱の兩足は殊に強く按摩すべ
 し
 輕擦を各強擦間に夾み終りに自力他力運動(蹠屈、背屈、翻覆及び輪
 狀運動)を行ふべきは言を俟たず
 膝關節の囊狀靱帶も全周達し得殊に前側に於ては膝蓋骨より
 上方に三四指横徑延びあり(第十七圖之を上突起と云ふ膝關節の
 腫脹は常に先づ此處に現はる

先づ輕擦法を以て大腿筋殊に四頭筋族を處し次に關節の強擦法

を行ふ始め上突起を按摩し次に固有

靱帶の兩側を其附著部まで下り次に

膝蓋骨の側縁に起り左右各横に關節

線に沿うて膝膈に入り終りに屈筋族

に接して指を深きに致し以て膝膈窩

底の關節囊を按摩す此際患者の脚は

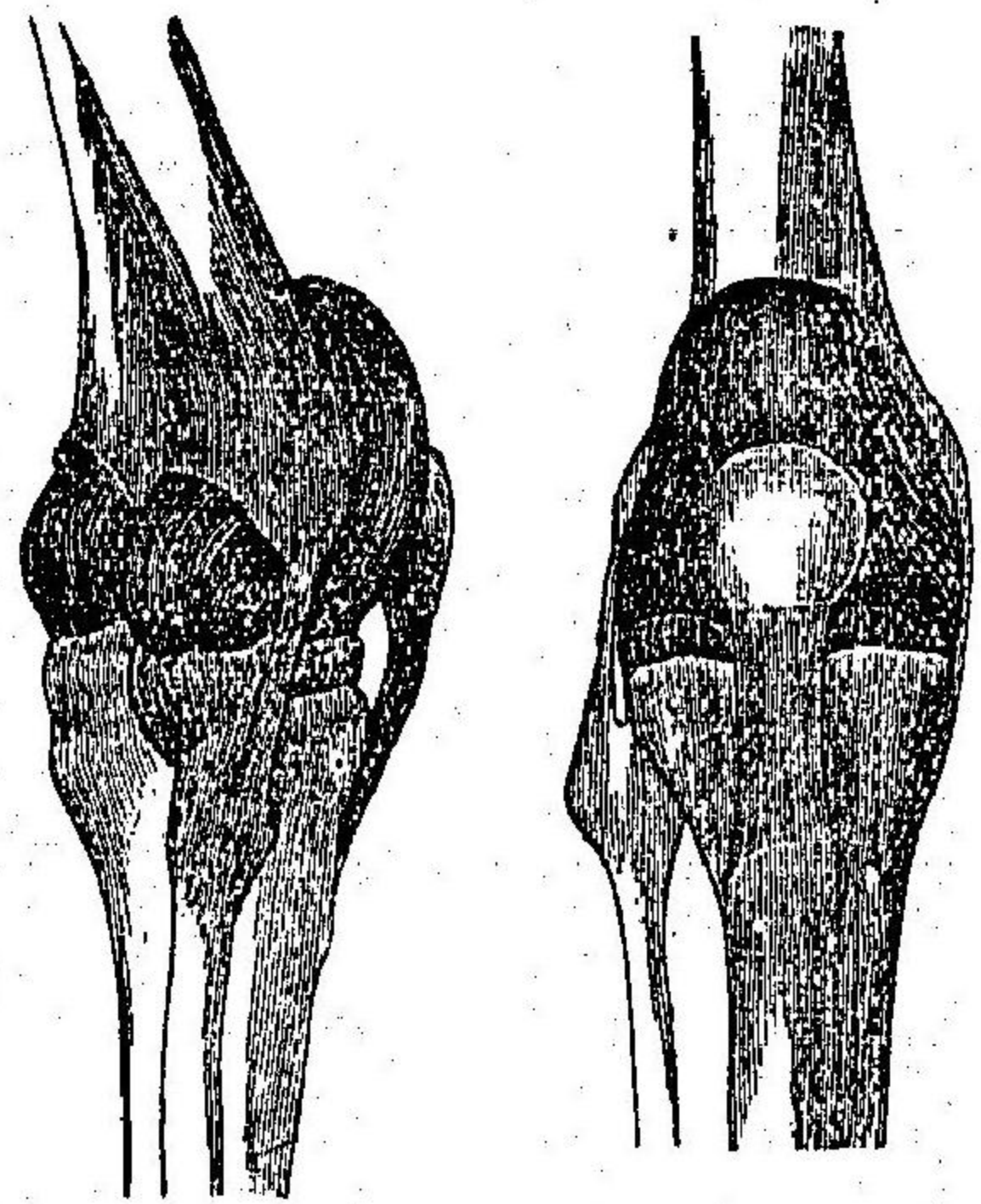
牀上に展へ又は術者の膝上にとる但し關節の兩側と後側の按摩

は膝を屈せしむれば容易なり

輕擦法自力他力屈伸及び反抗運動を以て四頭股筋の強健を謀り

之を以て按摩を終る

第十 七 圖



股關節は四周厚き筋層を被むり關節囊に達し得ず故に按摩し難し只自力他力運動を行ふのみ運動は屈伸内外送内外旋及び輪狀運動とす

第六章 其他の按摩

腹の按摩 日本按摩にして西洋按摩に最も近きは此腹の按摩即ち按摩なり按摩の主なる目的は便秘を攻むるにあり便秘は腸管の蠕動上端より下端に向ふ波状の運動にして糞便を漸く下方に送るもの弱くして其一部に糞便の堆積するものなり故に通利を謀るには此蠕動運動を喚起し催進し及び幫助せざるべからず之をなすに下劑及び浣腸あれども之より數倍穩妥にして且效の確

なるは按腹なり
 腸の蠕動及び糞便の通過は其上端より下端に向ふものなれば按摩するものは腸管の腹内にある状態を明にし居らざるべからず、胃は心窩にあり其右端より腸管小腸始まり腹の中央を下り右腸骨窩に於て大腸に移り大腸は此處より右季肋部に向て上り夫れより横に胃の下臍の上を通りて左季肋部に到り之れより路を轉じて下に向ひ左腸骨窩に到り之れより斜に内下方に行き肛門に終る
 患者は牀上に仰臥し枕を以て頭首を高くし股と膝とを屈し術者は患者の右側に坐す
 先づ準備按摩をなす準備按摩とは按摩さるゝことに慣れ居らざ

る人にありては只單に腹壁に觸るゝのみにて強く腹壁を緊張し手を深部に致すこと能はず此緊張を去りて按摩し得る如くする準備的の按摩なり最良の法は廻轉輕擦なり平手を恥骨縫際上に起し大腸の經路に沿ひ相交る所の圈を畫きつゝ擦行す若し腹壁脂肪に富む人なれば之に次いで腹壁強擦を行ふ即ち腹壁を撮み脂肪を碎挫して吸收に便するなり
 斯くして腹壁の緊張止むときは始めて大腸の輕擦を行ふ術者は其右手を用ひ上臍を殆ど水平に舉げ肘は直角に曲げ手を全く覆せ且成し得る限り背屈及び機屈して手指は恥骨縫際上に指尖は大腸の始端盲腸即ち右腸骨窩に向ふ如く之を腹壁上に置き之に左手を加へて指尖を成るべく深さに致し此指尖を以て第十八圖

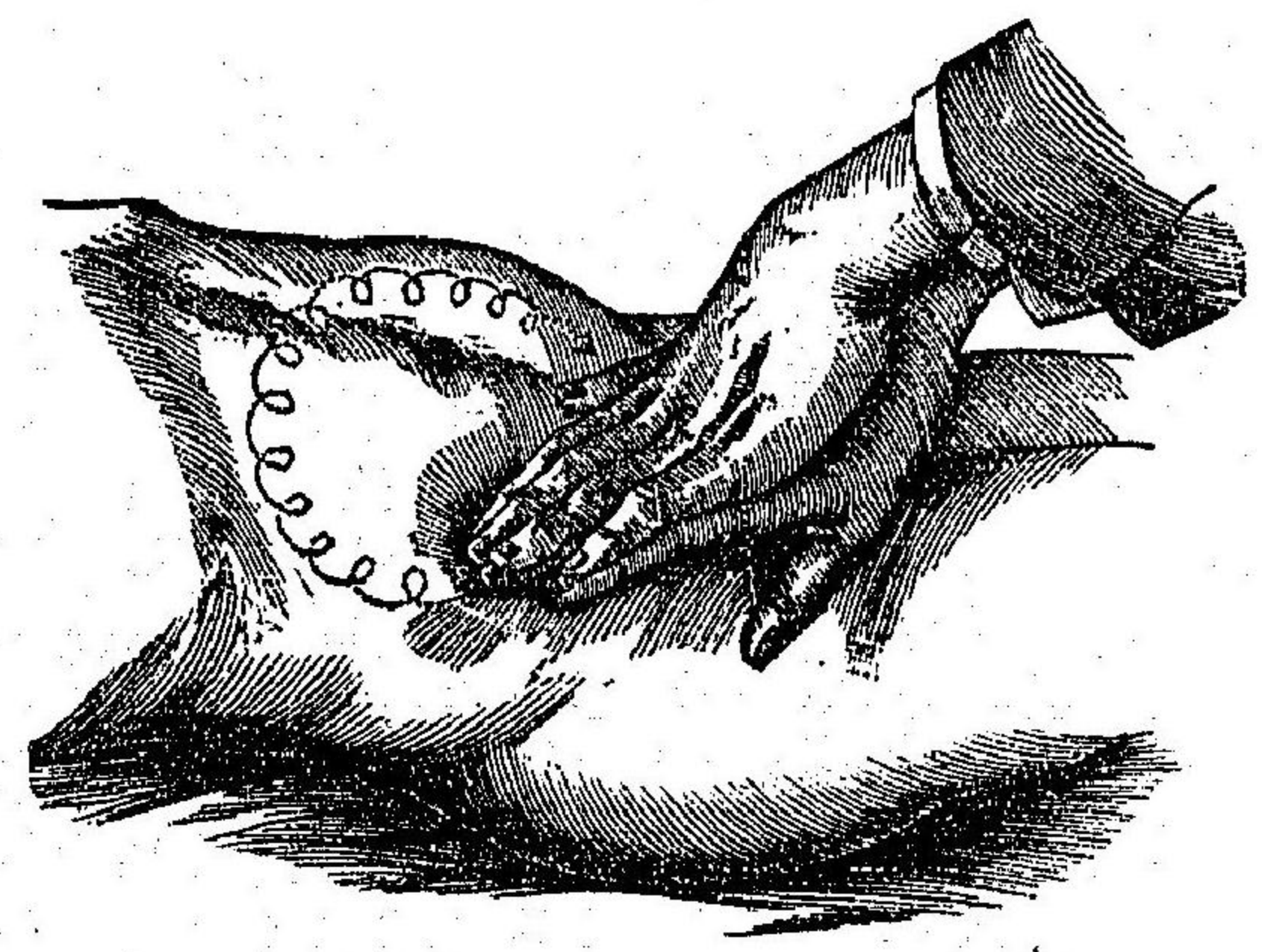
の點線の如く大腸経路に沿ひて擦行す、擦行左腸骨窩に達すれば

圖 八 十 第



手を浮して恥骨縫際上を横り始點に歸りて復新に擦行を始む斯くすること兩三回の後腹壁を多少休ましめんが爲二三の廻轉擦行を夾む次に廻轉揉捏法を行ふ此法は大腸輕擦法より糞便を人工に前進せしむる力強大なるものなり第十九圖之を示す、右手を下にし左手を之に重ね指尖を胸の方に向けて盲腸部に加へ患者に深呼吸を營ましめ其呼吸に乗じて漸く決して

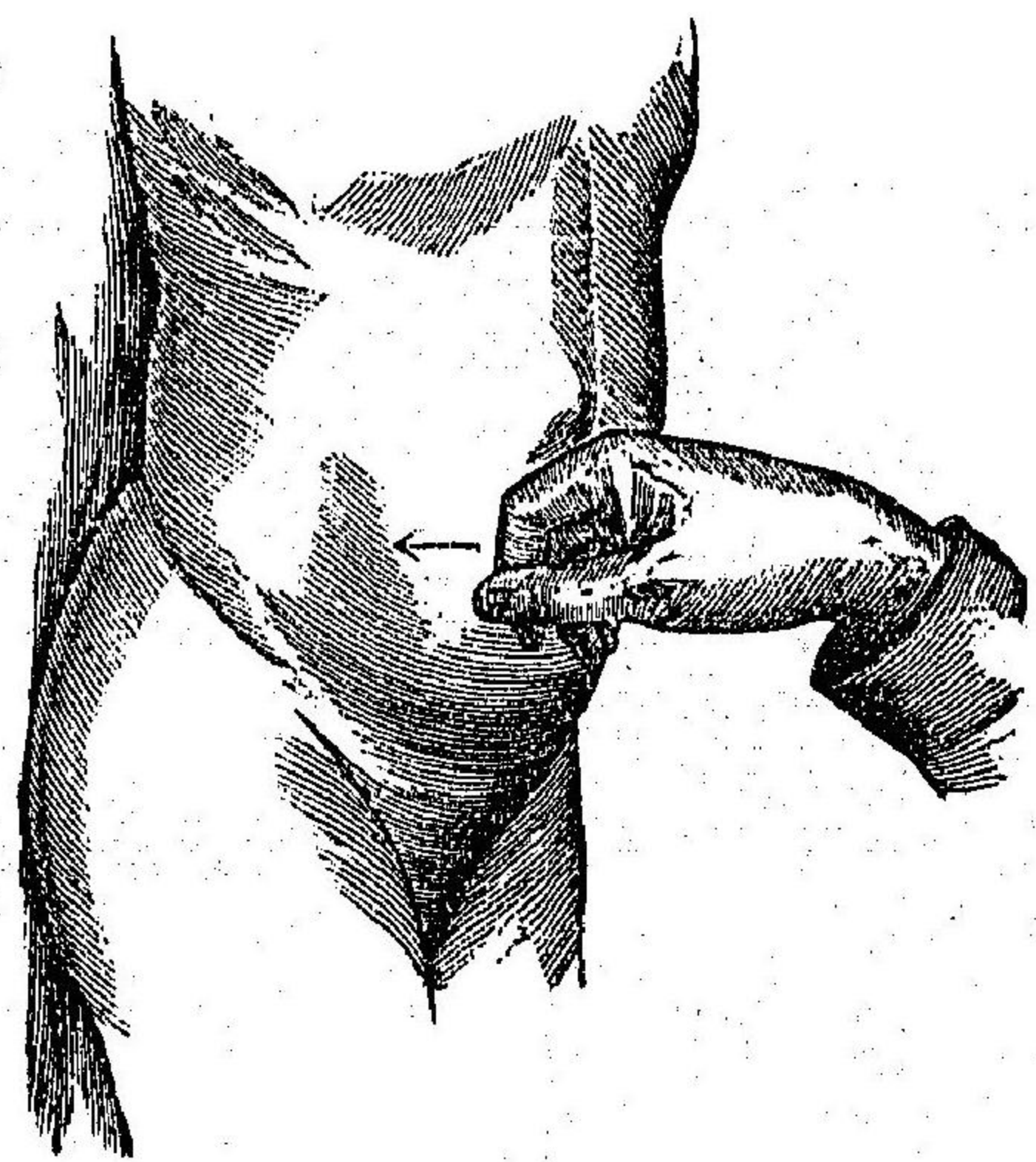
圖 九 十 第



急劇なるべからず手を深部に進め腸管に達せば指尖を以て小圈を畫きつゝ、腸管の経路を傳ひ行く此按摩も前按摩の如く兩三回反復すべし是れ迄述べたる按摩法は主として腸管内の糞便を可動にし及び之を下方に送るものなるが之と併せ用ひられて腸管の血液循環を佳良にし竝に腸壁の筋を刺戟して其蠕動機を催進する叩打法及び振顛法あり叩打の輕きは手背叩打法を用ひ強きは手拳叩打法を用ふ手拳叩打は第二十圖の如く手を垂直に腹壁に加へ第二指節の背面を以

て快手反復叩打す

圖 十 二 第

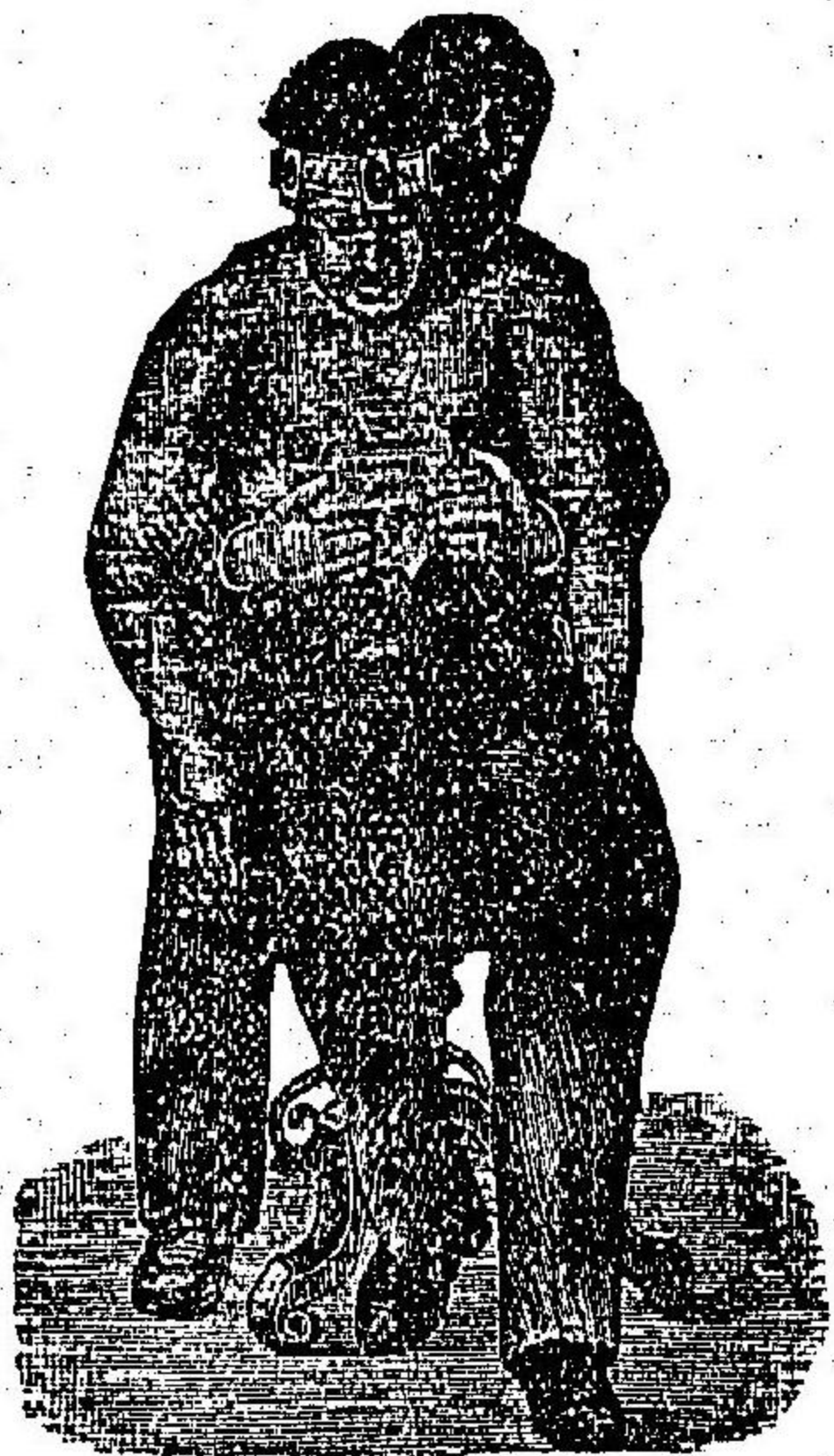


振顫を行ふ

按腹は必ず空腹時に行ふべく兼て又膀胱を空虚にし及び成し得

振顫法には平手を用ひ指を張りて之を腹の中央に加へ全腹を振顫す又指尖を以てすれば深部に振顫を行ひ得べし茲に特に指尖振顫法を要する處二あり一は劍狀突起と臍の中間一は臍と恥骨縫際の間とす呼吸を利用して指尖を深部に進め脊柱に達して

圖 一 十 二 第



れば浣腸したる後に於てすべし又按腹の後には患者をして腹筋の自力他力運動を営ましむ先づ膝と股を曲げて物を負ふ體形をなさしめ次に平に仰臥し此位置より手を以て支へずして體を起さしむ初には術者足を把りて之を助くべし

れば手を緩むることなく又牽くことなく只此處に之を持することなく

神經痛の中看護人等の手にて按摩し得るもの左の如し
胃(瘕)胃部の劇痛 患者の後よりして一線に鳩めたる四指を上腹部中線に加へ第二十一圖の示す如く心窩を深く且強く牽引し肋骨縁に到りて止む肋骨縁に達す

と二乃至三分なるべし初には或は患者却て痛を訴ふれども大抵二十乃至三十秒時にして輕快するものとす瘡にも效あり乳痛(乳房の劇痛なり) 矢張り後より手を廻はして左右各全乳房を把り左右に牽いて持するなり 他の特種の按摩は凡て醫師の命を俟ち行ふべきなり故に茲に之を述べず

按摩の葉終

明治三十八年八月廿三日印刷
明治三十八年八月廿七日發行

定價金三十五錢

著者

中原貞



發行者

田中増藏

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

印刷者

仁科衛

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

印刷所

厚信舎



發行所

東京市本郷區龍岡町三十四番地

吐鳳堂書局

(電話下谷一六七二番)



關西大賣捌

大阪市南區心齋橋筋一丁目
全 市同區心齋橋筋博勞町

松村九兵衛
丸善株式會社支社

弘通書林

東京市日本橋區通三丁目
同 市本鄉區湯島切通坂町
同 市本鄉區春木町二丁目
同 市本鄉區湯島切通坂町
同 市神田區鍛冶町
同 市本鄉區春木町三丁目
同 市本鄉區春木町三丁目
名古屋市本町三丁目
熊本市新二丁目
長崎市引地町
岡山市上之町
京都市寺町通二條下ル
金澤市片町

丸善株式會社書店
南江堂書店
半田屋書店
金原書店
朝香屋書店
南江堂支店
積運堂書店
丸善書店
長崎次郎店
安中集榮堂
渡邊宗次郎
若林茂一郎
宇都宮書店

下平文柳著
看病法修業用

人體の解剖及生理

全一册
(增訂第十版)

總價五十五錢
附插圖七十九
郵稅六錢

本書開卷第一に説く所の者は最簡單なる理學的誘導論なり之に次で説く所の者は最明快なる人體の略説なり而して是等に次ぐ所の諸篇は人體の系統的解剖學に就て説く所の生理學なり終に結論として人體に於ける新陳代謝及人體各器官の共働を述べ以て全篇を概括せり今それ僅に貳百五拾餘頁の冊子にして挿む所の圖畫七拾九個加ふるに通篇慎重なる傍訓を有す其讀者に忠なる亦想見し得らるべしと信す

下平文柳著
看病法叢書第二篇

私宅看病法

全一册
(訂正第二版)

總價十五錢
附插圖三十三
郵稅六錢

是著者が見習ひ看護婦に讀ましめんが爲に著はせる者にして歐西の學理を本邦の實狀に應用し殊に私宅看病時に於ける特殊の注意を述ぶるや細を指し微を摘み字々句々皆可言可行者を羅列したる者なれば實に有益の名著にして出張看護に従事せらるゝ諸嬢は勿論病院に於ける諸嬢家庭の衛生に注意深き人士の爲には寔に是無上の良師なり

岡山縣醫學專門學校教授
佐藤直樹
藥學士金澤巖著

袖珍調劑術

全一冊

第四版◎圖畫挿入
正價金四十五錢◎郵稅金四錢

本書は藥學得業士金澤巖氏が得意の著にして調劑學上の技術は勿論新舊藥の用量極量より配合禁忌、外科的防腐材料、飲料水牛乳の衛生的試驗法等に至る迄苟も藥局整理上必要な條項は一として漏すことなし加之文章簡潔流麗にして一言一句をも苟もせず最も實地の索引に注意せり故に本書一本を備へなば如何なる難事に遭遇するも毫も顧慮するの要なく從て失錯の憂なし

醫學博士朝倉文三
下平文柳著

花柳病の養生及豫防

附生殖器機能障礙

全一冊

圖畫挿入
正價金六十五錢◎郵稅金六錢

本書收むる所は花柳病の意義其個人乃至社會に及ぼす害毒。蔓延の状態。爲に被る社會の損害より花柳病の種々なる傳染經路其發展する症狀養生法終りに花柳病が結婚に及ぼす災害。結婚の適否及花柳病の種々なる豫防法等一小冊子の内に重要な學術的社會的問題を網羅し盡して餘蘊なき所は實に從來未だ他に發見せざる特色なり

醫學博士濱田伯理
醫學博士田中理一
醫學博士今井達郎
共著

普通產婆學

全二冊
(前編第二版)

總價正
附圖插冊各價
總價正
附圖插冊各價
總價正
附圖插冊各價

本書前篇は巖に産科婦人科の泰斗濱田先生の手に成り聲價籍甚世の後篇を待つと寔に早天の雲も當ならざりしが爾來先生公私多端ために學者の渴望を空うして今に至りき弊堂之を遺憾とし先生及關西に於ける斯學の俊傑佐伯先生に懇請し前篇には更に佐伯先生の増補を仰ぎ後篇は佐伯福田兩先生の手に依り發刊し全部完結を告ぐるの運に至れり是によりて本書は金彫の巧銀鏤の精を加へ首尾一貫遙に類を抜くの良著となれり

醫學博士北里柴三郎
醫學博士佐伯理一
醫學博士述郎

普通看病學

全一冊

增訂第十版
總價正
附圖插冊各價
總價正
附圖插冊各價

本書は我邦に發行せられたる看病學書中其記事の親切丁寧なる其類を見ず殊に二百有餘の挿圖を以て説明の不足を補ひたり其真價の如何は、版を重ねると茲に十一、世に布く一萬有餘以て證すに足らん

60
176

東京醫學大助手
醫學士唐澤光德述

育兒の話

全一冊

總ふなり附●圖畫挿入
正金價十五錢●郵稅金四錢

本書は斯學に合聞ある唐澤學士が自家親驗上より小
兒養育上の事を細大となく極めて親切に言文一致體
を以て述べられたるものにして育兒に注意せる家庭
には是非一本を備へざるべからず

楠田謙三述
鈴木准二編

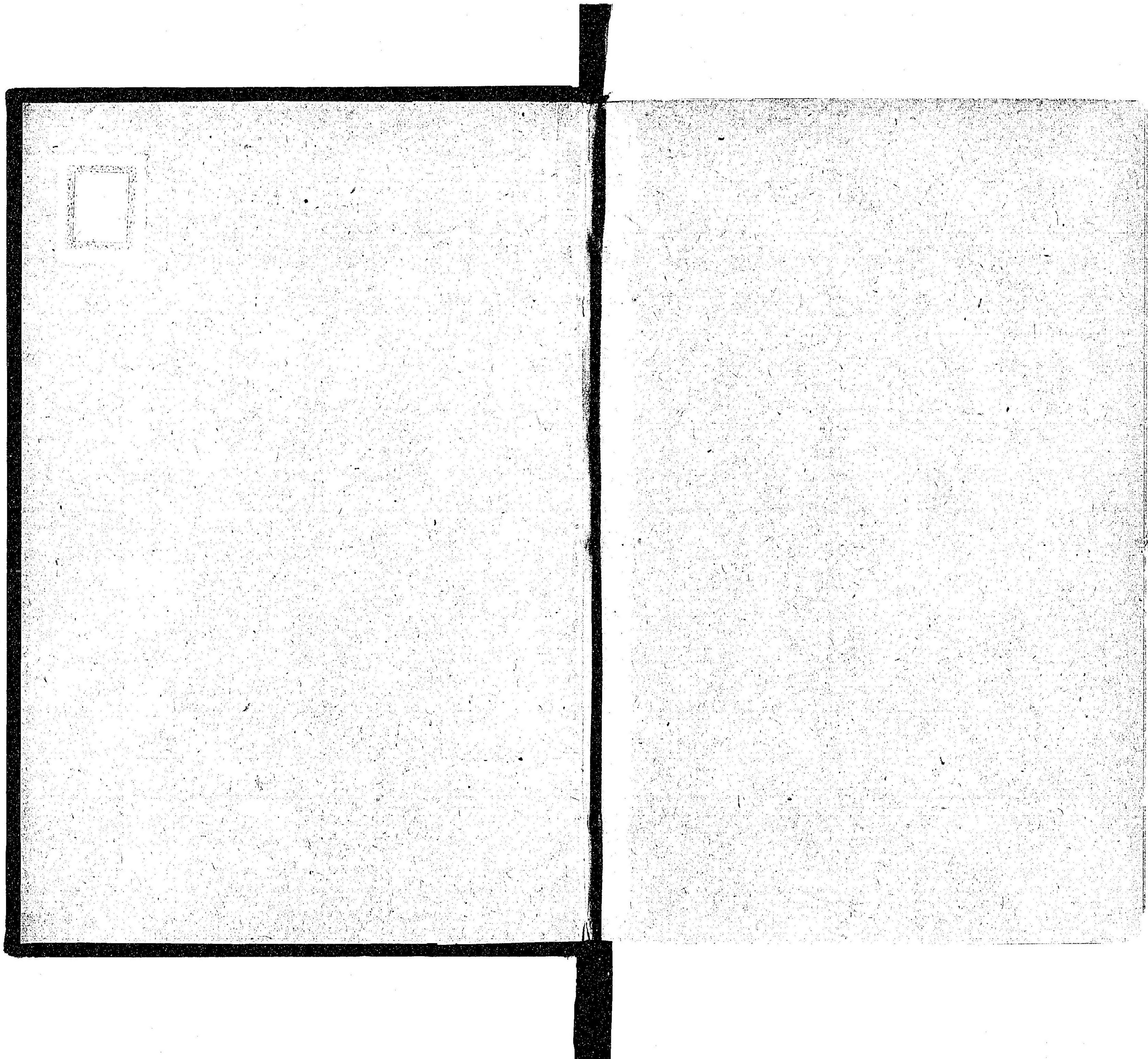
婦人の衛生

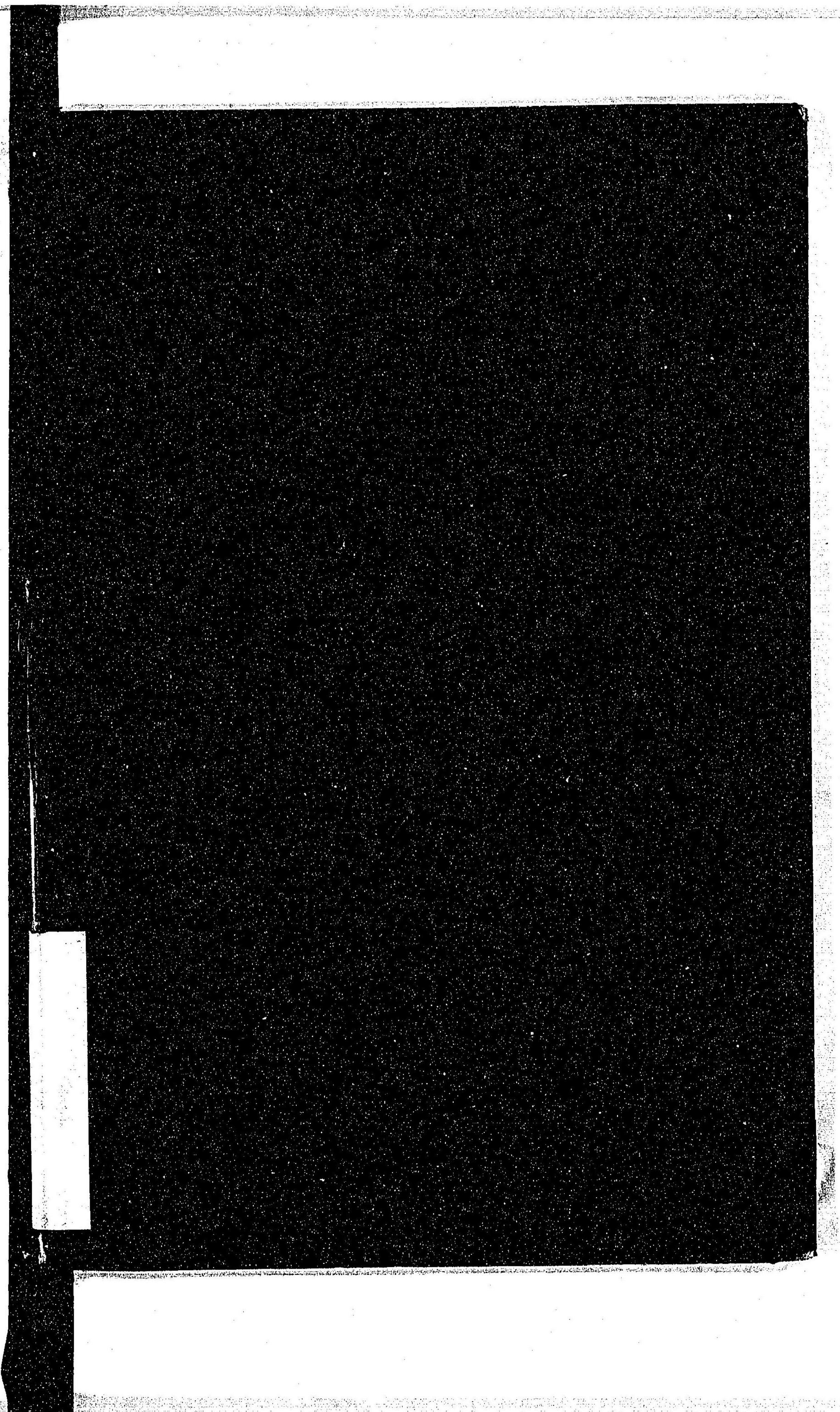
全一冊

總ふなり附●圖挿二十●
正金價十四錢●郵稅金四錢

此書は婦人の月經時、婚嫁時、妊娠時、分娩時、産
褥時並に其固有の疾病時に當りて注意すべき事柄を
漏すことなく記述し之に附するに小兒保育上の注
意、疾病時の注意を以てしたるものにして婦人は此
記述に準じて自愛するときは庶幾くは其健康を保持
し且愛兒を適當に保育することを得ん







60
176

058862-000-5

60-176

按摩の栞

中原 貞衛 / 著

M38

CBC-0439



